

教育運動史研究の歩み（下の2）

教育運動史研究会の研究活動

——「新興教育運動」研究の進展と残された課題——

柿 沼 肇

要 旨

本誌の前号（第132号，2015年9月）で述べた「教育運動史研究会の研究活動」に引き続き、今後は、「研究内容」の面に即してその取り組みの成果と残された課題について明らかにすることが主題となる。

この研究会（教育運動史研究会）が追究してきた「課題」は、大きく括ってみると以下の四つに整理することが出来る。

- ① 「新教懇話会」発足以来の主要課題である「新興教育運動」についての研究
- ② 「新興教育運動」以外の「戦前の教育運動」の研究
- ③ 「戦前の教育運動」の「戦後」への継承と、「戦後の教育運動」の研究
- ④ 「現代の教育運動」の研究

そこで、まず今回の小論では、①の「新興教育運動」の研究に焦点を当て、そこで生み出された成果を検討・吟味することにした。

最初に取り上げたのは、「新樹叢書」として刊行された三冊の書籍と、その中に加わることが期待されていた論稿のことである。筆者は前者が池田種生、増渕 穰、山口近治の三氏、後者が小田真一氏で、いずれもこの運動の中核にあってその発展のために全力を尽くした人たちである。これらの著作を通して、この運動がいかなる時代・社会状況の中で何を目指して展開されたものなのか、その「運動の全経過（前史から収束、その後）」とその運動が持っていた意味をより全面的・総合的に確かめることが出来るようになった。

第二は、「当時者」の筆になる二冊の「証言」記録集についてである。ここには中央の動向ばかりでなく、それぞれの地方（地域）や「教育の現場」で活動した様々な人たちの「喜び」や「苦闘」が「集積」されており、これらによってこの運動に対する認識をより「豊かなもの」にすることが出来る。

第三は、二度目の機関誌『新興教育』と、新たに発掘された新史料の復刻・普及のことである。これまで何度か指摘してきたことであるが、教育運動、とりわけ「新興教育運動」にとって当事者の「記録」や「証言」は極めて重要で不可欠なものである。が、それだけでは事柄の「正確さ」を十全に保障することは出来ない。個人の体験は運動の一部分であり、またその記憶には、それがいかに真摯なものであっても「誤解」や「誤認」を完全に避けて通ることは出来ないからである。資（史）料による裏づけがあることによって、そこにある「誤り」が正されたり、新しい発見が生まれてきたりするのである。その意味で、機関誌『新興教育』が再度復刻され、またたくさんの資（史）料が発掘されて多くの人たちの手に渡ったことはその後の研究の発展に大きな可能性を切り拓くものであった、といっていよい。

こういった諸成果の他にこの小論で取り上げたのは、○この運動の基本史料と重要論文を収録した「教育運動史研究資料」（第3号まで）の発行、○この運動の生成・発展の上で大きな理論的役割を果たした名著の複製である「新興教育基本文献集成」（5巻）の発刊、そして○新興教育運動の組織化の過程とその後の展開の上で大きな影響力を持った国際的な教育労働者の組織「エドキンテルン」（教育労働者インタナショナル）の研究について、である。またこの問題に関心を持つ人たちのためにいくらかでも役立つことがあればと考えて、「戦前」「戦後」の「エドキンテルン関係文献一覧」（未だ不十分さを免れていないが）を「資料」として付しておいた。

以上がこの小論で言及し得た中身である。当初の予定では「新興教育運動の研究」の全体について出来るだけのことを記すつもりでいたが、ここに述べただけでも所定の分量をはるかにオーバーしてしまった。そこでやむを得ず今回はここまでとし、その続きと冒頭に記した他の諸課題については次号（第134号、2016年9月発行予定）に掲載出来るようにしたいと思う。

キーワード：教育運動史研究会、「新樹叢書」、「証言」記録、史料の復刻、「教育運動史研究資料」、「新興教育基本文献集成」、エドキンテルン

はじめに

前回の「教育運動史研究の歩み（下の1）」（日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第132号、2015年9月）でも記したように、新教懇話会から発展した教育運動史研究会の活動を「研究対象」「研究内容」の面から大きく括してみると、それは次のようになる。一つは「新教懇話会」時代から引き続けている「新興教育運動」についての研究、二つ目は新興教育運動以外の「戦前の教育運動」の研究、三つ目は「戦前の教育運動」の「戦後」への「継承」と、「戦後の教育運動」の研究、そして四つ目が「現代の教育運動」の研究、である。

ところで、改めて振り返ってみると、この小論の（上）（本誌第130号に掲載、2014年9月）では「懇話会」発足以前、即ち、「教育運動史の組織的検討」が始まる前の時期（1950年代まで）

この運動に対する検討状況・研究状況を以下の3点にわたって述べておいた。

- 1 教育運動史の組織的研究とそれまでの新興教育運動関係論稿
- 2 何故、この時期新興教育関係の論稿が少なかったのか
- 3 新興教育運動に対する一面的・「批判的」評価の広がり

また（中）（第131号、2015年3月）では、「懇話会」が組織され、その検討が本格的に開始されるようになった時から教育運動史研究会へと改称・改組織されるまでの、その時期の活動について「新教懇話会の研究活動」と題してやや詳細に論じた。内容的には次のようなものであった。

- 1 新教懇話会の発足——最初の「教育運動史」研究団体
- 2 「運動の実態を語る」月例会と、充実した機関誌『新教の友』
- 3 創立記念シンポの開催と、はじめての通史『日本教育運動史』の発行
- 4 資（史）料の発掘、蒐集と複製版の刊行（雑誌『新興教育』と新たに発掘された「原資料」の復刻）
- 5 機関誌の役割も担った『「新興教育」複製版月報』の発行
- 6 「民間研」と共催した『「新興教育」シンポジウム』

そして、これらの前提的な諸活動の上に「運動史研」の研究が大きく花開くのである。「戦前」の天皇制政府が教育の面でもっとも畏怖し、徹底的に弾圧し、その影響さえも消し去ろうとした「新興教育運動」の実態が改めて人びとの間に認識されはじめるようになってきたのである。

前回の（下の1）（第132号、2015年9月）ではそのような形で発展してきた「教育運動史研究会の研究活動」について次のような中身を記したのであった。

- 1 新教懇話会から教育運動史研究会へ（研究対象と研究目的の広がり）
- 2 新しい通史『日本教育運動史』編纂の取り組み（「草案」と「成案」（原案）、編纂作業の「中止」、後学の参考に）
- 3 「教育運動史」研究を発展させるための諸活動
（教育運動史研究会夏季研究集会、機関誌『教育運動史研究』と『教育運動研究』、
『教育運動史研究ニュース』の発行と『はがき通信』）

そこで、これらを受けて今回は、冒頭に記した諸課題の内最初の課題である「新興教育運動の研究」において教育運動史研究会が達成し得た成果などについて書き記すことにしたい。

1. 「新樹叢書」の刊行——運動の全経過（前史から終息、その後）とその持つ意義の解明

先ず最初に取り上げるのは、新樹出版から「新樹叢書」として刊行された次の3冊の著作と、4冊目としてその出版が期待されていた論稿についてである。

- ① 池田種生 『プロレタリア教育の足跡』(1971年8月, 解題・岡本洋三, 注と追補・柿沼肇)
- ② 増淵 穰 『日本教育労働運動小史』(1972年7月, 解題・森谷 清, 注と追補・土屋基規)
- ③ 山口近治 『治安維持法下の教育労働運動』(1977年12月, 解説・岡野 正)
- ④ 小田真一 「わたしの新興教育運動」, 『教育運動史研究』第6号, 1962年9月
「わたしの生い立ち—『わたしの新興教育運動』のまえに一」, 同11号, 1969年9月
「思い出すままに」, 『新興教育複製版月報』No. 2, 1975年5月
「『新興教育』創刊のころと新教支局の活動について」, 『教育運動史研究』第17号, 1975年9月. 等々.

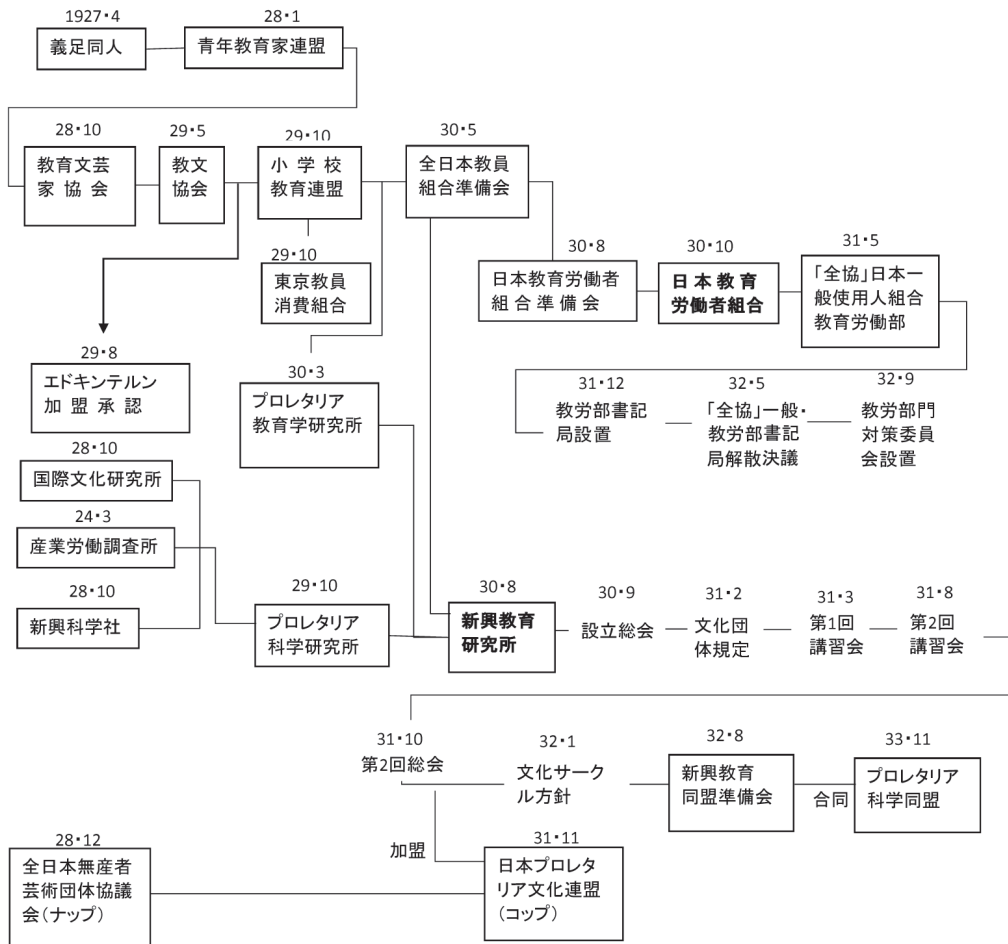
これらの著者はいずれも当時の組織の中枢にあって全力を挙げてこの運動の発展のために尽力した人たちである。「新興教育」の研究にとって、その出版、あるいは論稿が発表されたのは極めて大きな意味を持つ。これらの著作によって、この運動がどのような時代・社会状況の中で、何を目指して展開されたものなのかを知り、「前史」から弾圧によって「収束」させられてしまうまでの歩み・経過を確かめることが出来るからである。

出版元の新樹出版というのはここに名の出ている小田真一さんが実質的に起こしたものでそこでの企画・編集はいずれも教育運動史研究会の手に委ねられていた。いってみれば、この研究会の成果を世に出すために作られたような出版社なのである^①。

はじめの方の3冊にはいずれも「戦後」の研究者による的確な「解題」(又は解説)が付けられ、①と②には「注と追補」も付されていて、読者の理解を助けるのに大いに役に立つ。また、それぞれの巻末にある井野川潔さん執筆の「編者のことば」によって出版の経緯と各書の持つ意義などを知ることが出来る。最後の④小田さんの論稿は、「懇話会」および「運動史研」の機関誌などに掲載されたもので、関係者の多くは、これらの論稿がまとめられて単行本となり「新樹叢書4」として刊行されるのを当然の如く思い、その一刻も早いことを願っていたのであるが、小田さんの死によって遂に出版されることなく終わってしまった。

なお、これらの文献の著者が当時どのような役割を担っていたかを見てみると、ここに記した諸文献の「新興教育運動」研究史上に持つ重さが一層よく理解出来るのではないかと思う。(前々回の本小論(中)の中で、「図1」として記載した「『教労』・『新教』の組織変遷」図を再掲するのでそれを見ながらお読み下さるとありがたい。)

「教労」・「新教」の組織変遷（再掲）



池田種生と『プロレタリア教育の足跡』　そこで先ず『プロレタリア教育の足跡』の著者池田種生（本名・胤夫）さんであるが、池田さんは、兵庫县城崎郡の小学校教員時代に「啓明会」に加入している（1923＝大正12年）。そして郡内の統一学力試験に反対しそれを拒否したことによって事実上の「追放」処分にあい、上京する。以後本格的に啓明会の運動に参加するようになり、下中弥三郎が身を引いた後その責任者となって「会」の「解散」まで活動した。1930（昭和5）年8月の新興教育研究所創立に当たっては、「野上壮吉」の筆名を使って山下徳治、浅野研真両氏とともにその「表面」に立ち、年末の組織改編の折には常任委員になった。また、1932年8月「研究所」が「新興教育同盟準備会」に転換・組織替えした時には執行委員会の委員長に就任し、以後「準備会」が「プロレタリア科学同盟」に「発展的に解消」する（1933年11月）までの全期間にわたってその重責を担ったのである。また新興教育運動の収束後も、そして「戦後」においても、いつも教育運動の側に身を置き「真実の教育」を求めて闘い続けたのであ

た。

本書の構成は次のようになっている。(節の題名まで表示すると内容がよく分かるのだが、紙幅の関係で章までを記す。以下、断りのない限り同じ。)

第Ⅰ部 嵐に抗して——帝国主義侵略戦争の危機と教育運動——

- 一 プロレタリア教育の足跡 二 そのころのこと そのころのひと

第Ⅱ部 教育労働運動の胎動——教育労働者の社会的形成——

- 一 教育労働運動への胎動と歩み 二 啓明会運動の指導者たち

第Ⅲ部 資料／戦前における教育批判

- 一 『日本教育界暴露記』 二 『動きゆく社会と教育の展望』(抄) 三 農村教育論

なお、この書の「解題」(「戦前教育運動の歴史と池田種生の足跡」)の中で、岡本洋三さんは「池田種生は日本の教育労働運動の生成・発展の歴史とともに歩みを続けてきた。その運動とのかかわりは、たまたまある時期に関係したというような、ゆきずりの一時的な触れ合いではない。」(459ページ)、「池田の教育運動史の論稿や、回想あるいは教育運動の活動家たちの思い出の一つ一つには、このような日本の教育運動の歴史を自らの人生として歩み続けた闘いの歴史の重みと、その人間的真実の息吹きがこもっているのである。」(460ページ)と述べているが、そこには少しの誇張もない。また池田さん自身もこの書の刊行を心から喜んでいるようで、巻頭の「著者のことば」の中で次のように記している。

教育に関係して半世紀以上、つねに真実の教育を求めてやまなかった私ですが、早く教職を追放されたため、なんの恩賞もうけたことがありません。その私にとって、本書はまさに、教育解放運動五〇年の『記念塔』にふさわしいと、しみじみ感じている次第です。(2ページ)

増淵 穰と『日本教育労働運動小史』 増淵さんは、旧制中学時代から絵に熱中していたが、東京府立豊島師範二部を卒業後最初の赴任校(東京府下南多摩郡潤徳小学校)で浦辺 史さんに出会い、その影響を受けて教育に「開眼」。1928年に近辺の小学校教員(町田知雄、野津一郎、山口近治さんら)が作っていた教育文芸家協会(→教文協会)に加入。翌年10月、小学校教員連盟結成に参加し、それへの弾圧で「解職」(1930年3月)になった。同年8月、日本教育労働者組合準備会結成に参加(「教労」の正式結成は10月)、以後「教労」の中心的メンバーの一人として活動した。1931年5月「教労」が他の組合と合同して日本労働組合全国協議会(「全協」)傘下の日本一般使用人組合になると、その「教育労働部」の指導部員となった。また翌年7月には上部組織である「全協」の秘書局長になっている。1933年2月「全協」に対する一斉弾圧で検挙(35年5月に出された判決は懲役3年、執行猶予5年)。この「全協」本部の弾圧に前後して地方支部へくだった弾圧もすさまじく、1934年、「教労」の組織的活動は実質的に停止するところまで追い込まれてしまった。その後、1937年7月の教育科学研究会の結成に参加、幹事として活動するなどしている。「戦後」はいち早く教員組合の結成運動に尽力し、1945年12月

の「戦後」最初の全国組織・全日本教員組合（「全教」）では中央常任執行委員となった。他方、日本共産党の党活動に従事し、1955年以後は東京都委員などの指導的役割を担っていた。

増淵さんのこの本は全体が三部からなり、その第Ⅰ部「教育労働運動小史」では1946年10月14日の『週刊教育新聞』に掲載された「弾圧の下幾変遷 十余年の暗黒破って黎明来たる！」を「序章」にして、そのあと『明るい学校』誌第3号から第7号（第6号を除く、1947年6月～48年1月）に4回にわたって連載された同名の論稿（「大正」期の「日本教員組合啓明会」から「昭和」期「教労」運動の弾圧までについて論述）を配置し、そのところどころに自己の書いた以下の文献を差し挟むことによってより一層理解しやすく、また興味深く読めるように工夫されている。（ ）内は初出掲載誌。

- ① 「潤徳小の二つの教室」（雑誌『教育』1965年9月号、国土社）
- ② 「革命的な教育労働者組合の結成をめざして」（『日本教育運動史2』、三一書房、1960年11月）
- ③ 「教員俸給並びにその他一切の義務教育費の資本家国家全額負担運動」（『新興教育』1932年3月号）
- ④ 「『教労』と『全協・一般』との合同問題について」（②と同じ）

第Ⅱ部は、この書の出版にあたって第Ⅰ部の「続編」として新たに執筆されたもので、「戦後初期の教育労働運動」と題され、「戦前の教育運動は戦後いかに継承されたか」という副題が付されている。その構成は以下のとおりであった。

はじめに

一章 戦時下の教育運動 二章 敗戦と教育労働運動の再出発

三章 生活危機突破闘争から最低生活権獲得闘争へ 四章 教育労働戦線の統一

五章 教育民主化の闘いと教育研究運動

あとがき

こうして、日本の教育（労働）運動の歩みが「戦前」から「戦後」初期に至るまで一貫して記されることになったのである。この種のものとして一人の人が書いたものとしては最初のものであった、ということが出来る。そして、「戦前」の運動と「戦後」の運動との関係についての「いうまでもないことであるが、戦前の軍国主義とファシズム下の教育運動は、そのままの姿で戦後に引きつがれ発展したのではなく、戦後の新しい情勢と条件のもとで展開された教育運動をおしすすめる内面的なちからとして作用し、発展したのであった」（202ページ）という指摘は、大変重要な意味を持っている。この章の冒頭に記した「運動史研」の四つの研究課題の三番目「『戦前の教育運動』の『戦後』への『継承』……」を検討する上での基礎的な「視角・視点」を示しているからである。なお、この書には、『戦後初期の教育運動』への証言——『全教』から『日教労』結成まで——と題する運動参加者の座談会（司会は教育運動史研究会）の記録が掲載されているが、これも大変貴重なものだといわなければならない。この座談会も、本書の出版にあたって「運動史研」によって企画されたもので、増淵さんら元・「全教」の中央役員であっ

た人たちの他に元・「全教」機関誌『週刊教育新聞』発行責任者であった小田真一さん、教育文化運動の中心的活動家であった菅 忠道さん、それに窪田弘道さん（兵庫）など各地の組合の中心的指導者たち、紙上参加者を含めて13名もの方々がそれぞれの体験を基に様々の角度からの「証言」と「意見交換」をしている。いうまでもなくどんなにすぐれた人でもその「体験」は運動全体を覆うことは出来ないし、また事実誤認や主観的判断（誤解）を完全に避けることは出来ない。それ故に「個人」の体験を集团的・組織的に確かめ合うことが必要なのである（そのことを私は『証言』の組織化と呼んできた。新教懇話会や教育運動史研究会が切り拓いた方法で、ここにこの「会」が他の研究会と異なる独自性の一つがある）。そんな点からいって、この座談会記録は見事な出来栄であった、ということが出来よう。

この書と「座談会」については、多分、今回のこの小論でもう一度触れることになる。

第三部の「教育労働運動史資料」には、「教育文芸家協会創立宣言」から「戦後」の「民主主義教育研究会設立趣意書」に至るまで、全部で15編の貴重なそして重要な文献が収録されている。

山口近治と『治安維持法下の教育労働運動』 山口さんは東京府立織染学校卒業後豊島師範学校の第二部を出て、府下の小学校教員になった。1928年1月に八王子市立第一小学校に転任し、そのころ文芸誌『義足』同人の野津一郎さんを知り、野津、町田知雄さんらと『分教場』を発行するようになる。この『分教場』は間もなく教育文芸家協会へと発展し、教文協会と改称する。そしてこれが発展して小学校教員連盟となる。1930年1月「小教連」への弾圧で、前記増渕さんらと共に「懲戒免職」処分に付された。その後教員組合設立のために中心となって活動し、5月全日本教員組合準備会の結成にこぎつける。しかしながら当時の状況から「合法」的な教員組合を結成し運動を進めることは「不可能」であることが予側されたため、8月、「非合法」の日本教育労働者組合準備会へと方向展開、10月「教労」の正式結成を成し遂げる。そしてその中央執行委員長に就任したのであった。翌31年5月、「教労」が他の組合と合同して「全協」日本一般使用人組合になるとその中央常任委員になったが、8月に検挙されてその役から離れている。また、釈放後直ちに活動に復帰し、「教労部書記局」（「一般」結成の折に旧「教労」はその「教育労働部」になっていた）が出来てからはその書記局員、それが解体されて「教労部門対策委員会」が出来るとその委員長を兼務した（その少し前に「一般」の中央常任委員に復帰していた）。その後「一般」の中央常任委員長や上部組織「全協」の中央常任委員などを歴任している。また日本共産党に入党しその立場からフラクション活動なども行っている。他方1931年以来「治安維持法」違反などの容疑でたびたび検挙され、37年3月には「懲役3年」の実刑判決を受け、下獄した。さらに「戦時下」の1944年8月には「帆足計等と民主主義革命を画策しているとの容疑で憲兵隊本部に連行され、翌年2月末まで同所に留置」（著者作成の「略年譜」より、同書328ページ、傍点 柿沼）されるという経験もしている。ここに見ただけでも「戦前」の山口さんの苦闘に満ちたすさまじいばかりの闘い・生き方が想像され得るのではないかと思う。

著書『治安維持法下の教育労働運動』は、教育運動史研究会の機関誌『教育運動史研究』の第12号（1970年5月）に載せられた「非合法教員運動の追憶」が元になっている。その時の「二百四十余枚の書き下ろし原稿」について井野川さんは「山口さんは、信頼できる史（資）料・文献によりながら、『教労』の教育運動の事実在即して記憶を精確に思いおこして記述する、という姿勢を貫かれたのであった。それは、歴史学者が事実をとおして歴史の真実を探究するきびしさ、さわやかさに通ずるものがあった」（同書331ページ、「編集のことば」より）と記している。そして、それ以後に発掘された諸史料や自分でも「いろいろ新しい資料を入手」して「それらの資料に目を通し全面的に加除訂正を行った」（同書1ページ、「著者のことば」）のがこの書であった。全体は次のようになっている。

- 一 教職への道 二 懲戒免職 三 全日本教員組合準備会のころ
四 日本教育労働者組合のころ 五 全協・日本一般使用人組合のころ
六 全協中央部での活動 七 未決、既決のころ 八 憲兵隊拘留 九 終戦

また、その折に、初出時には論文中に組み込まれていた「^{れいご}囹圄の歌」の部分を独立させて配置したことによって、読む者はこの書から一層深い感銘を与えられるのである。「囹圄」とは牢屋・獄舎のことで、山口さんが留置場や獄中でしたための俳句や短歌がかなりの数収録されている。これによってそのような状況に置かれた者たちの「生活の一端」（170ページ）をうかがい知ることが出来る、その意味でも貴重な「記録」であるといつてよい。また、前記の井野川さんは、「その不当な刑に耐えながら『観察者』の客観的な目を失わない山口さんの視座が厳としてあることを、痛いほど感じる」と書いた上で、「まさに『治安維持法』は不法であった。ここの一首、一句を読むごとに、肌身を刺す痛みと、憤りとに耐え難い思いをする」（332ページ）と述べているが、この思いは当時の運動に参加した人たちにほぼ共通するものだといつてよい。

この「囹圄の歌」の後に収録されているのは、「運動参加者の証言」として山口さんを初めとする9人の人たち（岩代輝昭、上田唯郎、浦辺 史さんなどと、元・「全協」中央常任委員長の森下 寛さん）の参加による座談会の記録である。テーマは『『治安維持法下の教育労働運動』の想い出』で、副題にあるように『『新教・教労』から『全協』壊滅まで』の運動の模様が「一 昭和初期の教員運動の想い出」、「二 教育労働運動の展開のなかで」、「三 教育労働運動の独自性と組織問題をめぐって」の順に、活発に、そして率直・具体的に語り合われている。それまで余り知られていなかったことが数多くあり、特に「全協」についての研究は当時余り進んでいなかっただけに、「労働運動史」研究の面から見ても意義ある「座談会」記録であった。ここでも、前記した増淵さんの時と同じように、当事者の経験を組織的・集団的に検討することの有効性（大切さ）がよくあらわれている。

最後の「教労・新教・全協関係資料」には、「教労」の実質的な綱領・運動方針である「日本における教育労働者組合に就いての一考察」（いわゆる「渡辺良雄論文」、『新興教育』1930年11月号所載）や『『新興教育研究所』の新しき任務及び組織方針について』（「長田完治論文」、『新興教育』1932年1・2月合併号所載）、（いずれもこの運動にとっての大変重要な文献で、山口さ

んが中心になって執筆したもの）のほかに「全日本教員組合準備会宣言」,「(全協)一般使用人組合合同大会宣言」,「(同)教育労働部行動綱領(草案)」,「(同)行動綱領草案・規約」,「日本労働組合全国協議会規約・運動綱領」,「『天皇制打倒』の行動綱領に何故反対したか」といった当時の運動を知るうえでの基本的文献が収録されている。

小田真一と「わたしの新興教育運動」 小田さんは、広島県立油木農学校を出て一時就職、その後豊島師範学校第二部に入学、卒業(1927年3月)して、東京市の小学校教員となるが直ちに短期現役兵として5ヵ月間入営する。除隊後少しの間他の小学校に籍を置いたが、間もなく本所区の中和小学校に移り、本格的な教員としての生活が始まる。芝区三光小勤務の時に夜間の「豊師」専攻科に入り(1930年4月、卒業は翌年3月)、この年5月の全日本教員組合準備会を傍聴。この時師範同期の増淵さんとのつながりができ、8月の日本教育労働者組合準備会が発足するとともに増淵さんの勧めで加盟した。こうして小田さんの本格的な教員組合運動への活動が始まる。そして翌31年6月には新興教育研究所に入所し書記局、組織部、機関誌編集部を担当したが、8月「全協」日本一般使用人組合教育労働部への弾圧で検挙され(この時小田さんはその東京支部の責任者でもあった)、これを機に教職を退いている。翌32年8月「新教」は新興教育同盟準備会に転換したが、間もなく二度にわたって書記局員を中心とした弾圧があり、続いて東京支部を手始めに地方支部への大弾圧が始まった。幸い検挙を免れた小田さんは、逮捕された浦辺書記長代理の後を受けて、10月に書記長になって書記局を再建し、運動の停滞を押し止めるために奮闘したが、このような事態の中でそれは難しかった。1933年11月「同盟準備会」は「プロレタリア科学同盟」の中に「発展的解消」し小田さんはその中央書記局に入ったが、翌年1月からこの「科同」への弾圧が始まり、3月には小田さんも検挙・起訴され、翌34年10月末まで刑務所に収監されている。この間に日本プロレタリア文化連盟(「コップ」)を構成していた「科同」など10団体が解散を「声明」(4月)したが、小田さんは「検挙されて(いて——柿沼 補充)そのことを知らなかった」という。新興教育運動の終息後の小田さんは「総合技術教育」を目指した日本技術教育協会の活動や、その実験校としての大森機械工業徒弟学校の設立、技能者養成出版社の創立などに関わりながら「終戦」を迎える。「戦後」は草創期の教職員組合運動の機関紙『KYOIKU RODO』やその後継の『週刊教育新聞』の印刷発行責任者などの役割を担って、組合運動の発展に貢献した。

小田さんの「わたしの新興教育運動」には師範学校入学以後の活動ぶりが年次ごとに詳しく記載され、それを通して新興教育運動の展開の様子を具体的に知ることが出来る。この論稿の大きな特徴は、その「具体的な記述」というところにあって、それによって読者は自分がその場にいるような感覚(「臨場感」)を抱くというようなことさえ少なくなかった、といっていよい。前半の(1)では「新教第二回総会(1932年)まで」、後半の(2)では「コップ結成からコップ崩壊まで」が取り扱われている(「コップ」というのは「日本プロレタリア文化連盟」の略称)。そして、ところどころに編集部(筆者は井野川さん)の註や補足が付されていて、より正確な理解が

出来るように配慮されている。その内容構成（文中の小見出し）は、以下のとおりである。

- 昭和二年ごろ 豊師第二部のころ 短現で入営して 本所区中和小学校に勤める
- 三年ごろ 「共産党宣言」を読む マルクス主義への関心
- 四年ごろ 芝区三光小学校に移る
- 五年ごろ 豊師専攻科に入る 全日本教員組合準備会 東京教員消費組合 日本教育労働者組合準備会 日本教育労働者組合の結成大会 豊師ストライキ 教労機関誌編集部を引き受ける
- 六年ごろ 全協一般使用人組合教育労働部 東京支部教育労働部の活動 雑誌「観念工場」その他 新教の夏期講習会 地方の組織について 東京支部教労部への弾圧 東京支部教労部の再建 新興教育研究所へ入る 〔以上 (1)〕
- 六年の秋 コップ結成と新教 無産託児所設置の運動
- 七年ごろ 新教書記局の構成 新教同盟の方針 関西地方への出張 新教組織部の活動 コップ出版部との連絡 新教東京支部準備会 コップ東京地協への参加 同盟準備会の結成 同盟準備会の中央組織 再建後の書記局 地方組織との連絡
- 八年ごろ コップとの連絡 長野・静岡の弾圧 「教育科学研究」など 新教の科同への解消 科学同盟での活動 青森・兵庫の弾圧
- 九年ごろ 科同への弾圧 コップの崩壊 〔以上 (2)〕

この (1), (2) を掲載した『教育運動史研究』第6号にはそのほかに「思い出すままに——地方組織（と——柿沼 補充）の関係その他——」と題する小田さんの論稿が載っている。これは、それまでには『新教の友』に掲載された「地方支部の報告」や「従来のプロレタリア教育運動研究家」の書いたものの中には、「当時の地方組織弾圧が、本部のダラシナサに原因している」とするものがあるがそれは「誤解」であり「事実無根であること」。「支配権力側の資料」には「故意にそのように書いているふしが見られる」のでそれを「引用し、利用する時には「その政治的意図は何か、まず、いちおう疑って、実証的に考察を進めてほしい」という点から、当時の官憲が弾圧の中心に置いた「組織部」の活動やそれに対する取り組み（対処）の模様などを具体的に記している。そして、井野川さんはこの一文について、冒頭にある「編集部の前がき」（無署名だが筆者は井野川さん）の中で「いままで私達にはっきりしなかった組織部に関する問題について、貴重な証言がされている」、「まえの二文とともに読み合わせると組織部の事情が、具体的に明らかになってきたと思う」と述べ、「このような重要な証言を、進んで書いてくれた小田に…中略…読者とともに感謝したい」とまでいっている。このことは、新興教育運動の実像を知るうえでこの論稿が大きな意義を持っていることを示している、といってよい。そしてまた、機関誌編集部が形式的には独立しているこの一文を「わたしの新興教育運動」(1), (2) の後に続

くもの、いわば(3)として位置づけていることの意味も理解できるのである(表紙にある目次ではこの3本の論稿を並べて「わたしの新興教育運動」と表記している)。なお、これだけでも十分に一冊の本になるが、それに前記の諸論稿などを加えると一層充実したものが出来上がったに違いない。ところが前記したようにこの本の出版は実現しなかった。山口さんの著書の校正が進められている頃、小田さんが急逝(1977年8月)してしまったからである。もし「新樹叢書4」として小田真一著『わたしの新興教育運動』が刊行され、池田、増淵、山口の三氏の物と並べて読むことが出来たら、後学の者たちは「新興教育運動」の実態と意義をより深く理解し、この運動から一層多くのものを学び取ることが出来たに違いない。それを思うにつけ、生前の小田さんに何故もっと強力に出版の「決断」を迫らなかったのかと悔やまれて仕方がないのである。

2 当事者の「証言」記録集——運動の豊かな展開と苦闘の集積

もっとも、そういったからといってこの4人の著作を読めば「新興教育運動の総て」が分かるというものではない。そのことを一歩でも進めるためには、全国各地でこの運動に参加しあるいは関係を持った数多くの人たちにその「体験」を語り、記録してもらうこと、そしてそれを組織的・集団的に検討すること(「証言」の集積とその組織化)が不可欠である。その点で新教懇話会・教育運動史研究会の月例会や研究集会などの取り組み(そして機関誌などに掲載した活動)は画期的なものであった。

この種の文献(単行本)としては、既に1950年代に後藤彦十郎編『魂あいふれて——二十四人の教師の記録』(百合出版、1950年10月)や国分一太郎編『石をもて追われるごとく——受難教師の記録』(英宝社、56年11月)などが出版されている。前者に収録された「記録」は、そのほとんどが「戦前」・「戦後」の「生活綴方教育運動」に携わった人たちの「実践」の一部を記したもので、特に生活綴方運動そのものについての「証言」ではない。しかし、「運動」の中から生まれた「実践」の記録であるから「教育運動史研究」としてもこれを無視するわけにはいかない。また、「新興教育運動」の研究の面からいうとその中に戸塚 廉さんの「生活学校から」という文が収録されていることに注意を払っておきたい。その文は「一つの修身」、「青年のイタズラ」からなり、収録にあたっての「まえがき」には「つぎにかかげる二つの記録はわたしが、静岡県下で新興教育運動に参加していた当時のことを『生活教育』に書いた数十篇の文章から書きぬいたものである」と記してある(宮原誠一・国分一太郎監修『教育実践記録選集』第四巻240ページ、新評論、1966年12月)。後者の『石をもて追われるごとく』には、「まえがき」にあるとおり「大正のはじめから、昭和二十五、六年にかけて、それぞれなんらかの意味でひどい弾圧をうけた十三人の教師の手記が集められて」いる。その中に、この小論の(上)で概略を紹介した池田種生さんの「逆風鳥記」(筆署名 野上壮吉)の他に、題名だけ記しておいた新興教育関係の次の三つの論稿が収録されている。

川田由太郎(浦辺 史)「社会的目ざめ即失業」 戸塚 廉「新興教育同盟支部づくり」

前田卯門「教員組合をつくって」

これらはいずれも新興教育運動についての論稿が極めて少なかった当時において非常に貴重なものであったが、この運動の概要すら分かっていなかった状況の下ではその持つ価値が十分に読者に伝わらないという「恨み」（「制約」）があった（勿論このことは執筆者に責任があるということでは全くなく、あくまで「教育運動史研究」という目から見て、ということである）。こういった事態に画期的な転換をもたらしたのは、この小論でも何度か触れたことのある『日本教育運動史』（全三巻、三一書房、1960年9～12月）である。そこでは、一部を除く各章の後に「記録」として当事者の体験に基づく「証言」的文章が掲載されており、それ自体が一つのまとまりを持ちながら同時に各章の中身をより豊かに理解することに役立っている。

『嵐の中の教育 1930年代の教育運動』 1971年12月に出版された『嵐の中の教育 1930年代の教育運動』（井野川潔・森谷清・柿沼肇編、新日本出版社）は、その『運動史』に掲載されたものの中から新興教育運動とその前史に関わるものを取り出し、それに新教懇話会以来の機関誌やそれ以外のものに掲載されたものを加えて編集したもので、この運動に関する最もまとまった「証言」集であるということが出来る。しかし、それだけではどうしても前記の「制約」を免れることが難しい。そこで改めて次のような措置をとることによって各「証言」の持つ意義が一層深く理解出来るように工夫されたのであった（そのことはまた新興教育運動についての認識がより一層豊かなものになるということでもある）。その一つは、編集委員会内部で相談の上井野川さん自身に「体験的教育運動史」を書き下ろしてもらい、それを冒頭に配置すること、二つ目が各章のはじめに「時代と背景」を記してその中に各論稿についての簡潔な解題風コメントを含めること、三つ目はこの時期の（1917年～1936年）の「教育運動史年表」を付して理解を深める手助けをするということ、などである。こういった工夫もあって、この書は、類書に例を見ないような充実したものに仕上がりを、以後の研究にとって見落とすことが許されないほどの重要性を持った文献の一つとなったのである。最初の井野川さんの論稿は、表題にあるように井野川さん自身の「個人的」な体験を記したものだ、同時にそこには1930年代という時代と、その中で青年教師たちが新興教育運動に参加していく必然性が示されていて、個人の体験でありながらそれを超えた「普遍性」とでもいってよいようなものを読み取ることが出来る。これによって「当事者のふれた事実によって運動の実態を」という「懇話会」以来の活動に新しい一歩が築かれるということになったのである。以後、こういった体験を綴る時にはその参考にされることが少なくなかった。その内容構成は以下のようであった。

- | | |
|---------------|----------------------------|
| 1 新教との出会い | 2 「小さなねじの階級性」 |
| 3 第2回総会とコップ加盟 | 4 学齢前児童教育（研究会―柿沼補足）との共同研究会 |
| 5 ブタ箱の経験と反教育 | 6 新教教育部と『現代教育』の編集 |
| 7 新教の科同への合同 | |

全体が事実に基づいて具体的に書かれているので、読みやすく理解しやすい。例えば5に出てく

る警察署（ブタ箱）での「特高」とのやりとりなどを見てみると、当時の活動家は検挙されてもこんな風に闘ったのだということがよく分かる。その情景が目には浮かんでくるような気さえする。実に見事な筆の冴えである。

この書の全体の構成は、まず出版の狙いや課題意識を述べた「刊行のことば」があり、その後、前記井野川さんの「体験的教育運動史」が「序章」として配され、以後、「第一章」から「第三章」までに分けて合計22本の「記録」が掲載されている（それぞれの章には前に述べたようにその最初に「時代と背景」が置かれている）。そして、「教育運動史年表」があり、最後に「あとがき」があってそこには収録にあたっての「基準」や「記録執筆者の横顔」（当時の経歴を中心にした簡潔なもの）などが記されている。そこに収められた諸文献は以下のとおりである。なお、収録にあったのは、「編集者の責任」で「用字・用語の統一」やこれまでの研究で「明らかになっている事実の誤り」、「その後事実がはっきりしたことなど」について「必要な訂正」がなされている（332ページ）。また、一部については題名に若干の変更や、二つの記録を一つにまとめたものもある。（出典＝初出誌の記載では、『日本教育運動史』第一巻を『運動史①』、第二巻は『運動史②』。新教懇話会機関誌『新教の友』は『友』、教育運動史研究会機関誌『教育運動史研究』は『研究』、『新興教育複製版月報』は『月報』と略記する。）

第一章 教育労働運動のめばえ

- | | |
|--------------------------|---------------|
| 1 啓明会創立六周年に思う | 下中弥三郎 『運動史①』 |
| 2 木崎農民学校——いわゆる木崎争議をめぐる—— | 田中惣五郎 同上 |
| 3 エドキンテルン・ライブチッヒ会議に参加して | 平野義太郎 『運動史②』 |
| 4 東京教員消費組合と京浜間での活動 | 伊藤 信雄 |
| | 『月報』五号、『研究』八号 |

第二章 新教・教労——嵐の中のあゆみ

- | | |
|--------------------------|---------------|
| 1 新興教育運動の風雪のなかの小屋番的役割 | 池田 種生 『運動史②』 |
| 2 新興教育研究所の創立のころ | 森（山下）徳治 『友』三号 |
| 3 教育への反逆——新教・教労の活動へ—— | 宮原 誠一 『月報』一号 |
| 4 新興教育のあけぼの | 帆足 計 『月報』四号 |
| 5 川田由太郎と新興教育運動 | 浦辺 史 『友』二号 |
| 6 革命的な教育労働者組合の結成と合同問題 | 増淵 穰 『運動史②』 |
| 7 新興教育同盟準備会からプロレタリア科学同盟へ | 小田 真一 同上 |
| 8 全協での活動と弾圧 | 山口 近治 『研究』十二号 |

資料 新興教育研究所創立宣言（新興教育研究所）

日本に於ける教育労働者組合運動に就いての一考察（渡辺良雄）

第三章 支部から 教育の現場から

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1 青森支部教育方針の成立について | 相馬寒六郎 『運動史②』 |
|-------------------|--------------|

- | | | |
|----|--------------------------------|---|
| 2 | 長野支部の運動について | 藤原 晃 同上 |
| 3 | 兵庫支部の思い出——古い日記から—— | 大田 耕士 同上 |
| 4 | 教労沖縄・八重山支部の組織と活動 | 桃原 用永 『八重山の民主化のために』（1970年） |
| 5 | 朝鮮における新教支局準備への弾圧 | 上甲米太郎 『月報』 二号 |
| 6 | 高師・文理大の新教グループ——当時の学生運動の一環として—— | 安部 綱義・石川五三二 ^{いそじ} 『教育』（1966年5月号） |
| 7 | 内面の要求を保持して | 黒滝チカラ 『運動史②』 |
| 8 | 修身科授業記録——天皇陛下 | 脇田 英彦 文部省学生部 『プロレタリア教育の教材』（1934年） |
| 9 | 東大セツル児童部と労農少年団の思い出 | 菅 忠道 『運動史②』 |
| 10 | 亀戸無産者託児所のころ——母・子・保母—— | 鈴木 俊子 『婦人の友』（1931年） |

『いばらの道をふみこえて 治安維持法と教育』『嵐の中の教育』とほぼ同種のもの（当事者の体験記録集・「証言集」）として、それからほぼ5年経った1976年8月、『いばらの道をふみこえて 治安維持法と教育』（民衆社）が出版された。この本の刊行動機や狙いなどについて、当時日本民間教育研究団体連絡会（「民教連」）の世話人代表をしていた大槻 健さんが「まえがき いばらの道を踏み越えるみちのり」で書いている。それで見ると、最初の契機は「春日質問（この年1月に国会で行われた春日民社党委員長による「戦前」の「共産党スパイ事件」に関する質問のこと——柿沼）のように、公然と戦前への復活を示唆する発言が行われたことに、私たちは必要以上に警戒しなければならない。それは戦後に生まれ、戦後に育ってきた者にとってとくにそうでなければならないのではないか」という思いを持ったことに始まる。そこで「戦前の体験者である寒川道夫さんや井野川潔さんをはじめ教育運動史研究会の人たちに相談」して、企画を進めることにしたのである（編集には大槻さんのほかに当時日本作文の会常任委員の寒川さん、教育運動史研究会運営委員長の井野川さんが加わった）。そして、当事者・関係者に対して次のような「趣旨」を伝えて、執筆依頼をしたのであった。そこには教育運動史研究におけるこの種の取り組みが持つ「現代的な意義・必要性」が述べられているので、少々長いが文中からその部分を引用しておきたい。

戦前、戦時下の厳しい教育統制と圧迫のなかで、子どもたちを心から愛し、仲間を大切に、限りなく祖国を愛して、未来に希望をつないで奮闘しつづけた教師たちがいます。その多くの教師たちは、今日では考えられないほどの不当な迫害と弾圧を受けることになりました。

その多くの教師たちの教育に対する考え方、教育実践（運動）のどのような点が弾圧の対象になったのでしょうか。子どもを愛し、国民の願いにこたえようとしたがために、それが弾圧の対象になるというこの苛酷な歴史の事実を絶対に忘れてはなりません。

したがって今日の若い教師たちに、この不当な迫害と弾圧に対して抗議し、たたかいつづけた当事者、関係者が、当時のなまなましい体験を再現、証言して伝えておくことが、今日ほど要請されている時代はないと思われます。そのなかから、教訓を発展的にひきついで、今日の政治、文化、とくに教育の分野のたたかいの糧にしたいと考えます。

そのためには、“弾圧はひどかった”ということにとどまらず、それとどうたたかい、戦後のたたかいへとつなげていったのか、という視点を大切にしていきたいと考えます。教育における民主主義の確立は、歴史の遺訓をうけつぎ、発展させていくことによって成り立つものであることを、全体をとおして実感できるようにしたいと期待しています。(5～6ページ)

『嵐の中の教育』の折には、新興教育運動について国民や教師の間にその存在がほとんど知られていないばかりでなく、一部の者たちからは不当な「批判」が繰り返されていたこともあって、どちらかというとその運動の全容を明らかにし、正確なものにするというところに力点が置かれていた(収録された文献は既に発表されていたものを収録)。それに対しこの書では、「時代」に向き合い、そこにある「困難」を克服して新しい展望を切り拓くために、あるいは、「時代」の重苦しさに「絶望」してしまわないで「希望」を持って教育の仕事に立ち向かっていくために、当事者・関係者の体験記録・「証言」的記録(ひいては「教育運動史」の研究)が役にたつ、力を発揮するという認識があることを認めることが出来る(収録文献は、一部を除いて、そのような観点から新たに書き下ろされたものである)。総体としていえば教育運動史研究の持つ意義が一段と発展的にとらえられるようになってきている、ということである。

なお、厳密に言えばこの書は教育運動史研究会の活動成果であるというわけにはいかない。しかし刊行に至るまでの経緯や収録文献執筆者(新興教育運動のなどの当事者・関係者、それに「戦後」の教育運動史研究会の会員など)の顔ぶれから見ると、それに準ずるものだといって差し支えない。各章に収められた文献は以下のとおりである。その後に「補論」として伊ヶ崎曉生さんの「戦後教育における教師のたたかいのすじ道——戦前・戦後の日本の教育——」が載っており、最後に『治安維持法』と教育・関係略年表」が付されている。

第一章 真実を求め、子どもたちを愛し

生活と教育の破壊の元凶——大恐慌下の東北の子ども——	逸見 久吉
教育創造の芽をつむもの——治安維持法の現代版の化物を見て——	村山 ひで
春窮の農村から——植民地・朝鮮でのたたかい——	上甲 米太郎
吹雪をついて——「教労」秋田支部の結成——	工藤 清八
暗い高い一つしかない窓——新潟県教育労働者組合結成まで——	山本 五一
創造的な教育実践をめざして——雑誌『生活学校』の運動——	戸塚 廉
現実を認識させるために——生活図画教育運動のこと——	熊田満佐吾

第二章 圧迫と弾圧とのたたかい

殺して帰すとはなににごとか——倉岡先生と私たち——	窪田 弘道
憤りは大地にひそむ——『北方教育』同人の弾圧——	加藤周四郎
倒れた同志をしのびつつ——教労神奈川の活動家群像——	黒滝チカラ
行動力のある人間、そして人間愛を——長野でのたたかいと弾圧——	藤原 晃
悪法の濫用を拒みとおす——虚像の「生活主義教育事件」——	入江 道雄
行為なきを罰す——「保育問題研究会」活動への弾圧——	浦辺 史
よりよい教育を念願して——生活綴方運動の前後にわたる圧迫——	佐々井秀緒
怒りはいまでも胸底に——北海道綴方教育連盟事件——	坂本 亮
簡性村長，北原薄愁クラスの特高——私の「予審調書」——	増田 実
治安維持法断罪——今，ありありと獄の日々——	寒川 道夫
民主教育研究運動発展の源泉——「教労」弾圧の歴史——	増渕 穰
私たちの「新教」「教労」への弾圧——「悪法は法ではない」新教兵庫支部倉岡愛穂——	井野川 潔

第三章 屈辱に耐え，いつの日か！

獄を出てから——選ぶべき道を確認めながら——	今村 波子
牢獄と闘病——若き日の一生活——	相馬寒六郎
大きな転換を——「社研」と「教労」の活動に参加して——	安部 綱義

3 『新興教育』（第二次）と発掘された新史料の復刻——研究の新展開を促す基礎

「教育運動史研究」一般についてもいえることであるが，とりわけ「新興教育運動」の研究にとってその研究を促進する上で当事者の「証言」やその記録は極めて重要な意味を持っていたが，もう一方，資（史）料の発掘・蒐集・公開・普及の活動も欠くことの出来ない重要なものであった。いうまでもなく個人の記憶ではそれがいかに真摯なものであっても「誤解」や「誤認」を完全に防ぎきることは難しい。資（史）料による裏づけがあるとそのことによって過りが正されたり，新しい発見があったりするからである。

「戦前」の天皇制政府は教育運動の中ではこの運動に対して最も大きな「危機意識」を持ち，司法・検察当局による徹底的な弾圧，行政当局による執拗な行政処分（関係教員の不意転，免職，免許状褫奪など）が行われた。また，組織の出版物や関係者の著作（いわゆる「運動側資料」，「第一次史料」）はその多くが事前検閲によって発行停止に追い込まれたり，発売禁止処分に付されたりした。そこで組織としては，検閲のための届出をする前に現物の大半を手渡しや郵送してしまい，実際にそれらの処分が出された時の被害を最小限にくい止めるような工夫もしたのであった。しかし，実際に手元に届けられたものも，警察の家宅搜索や検挙の折に押収されてしまったり，あるいはまたその危険性を予期して自らの手で処分してしまったりもした。さら

に、弾圧の際に「証拠」とならないように文書類は出来るだけ少なくして出来るだけ口頭によることにしたり、読んだらすぐに焼却などの処置をとるような努力もしたのであった。しかも、「戦時」期になると、戦災で消失したり、疎開・転居などの折に処分・紛失されることも少なくなかった。要するに、こういった様々な事情が重なって「戦後」まで残存した「運動側資料」は極端に少なかったのである。新教懇話会が発足して最初になさなければならなかったことは、「戦前」の運動当事者・関係者の存否と居所を確認していくこと、それらの人たちに記憶を呼び起こしてもらい「証言」や「記録」を記してもらうこと、それと共に手持ちの資料（所蔵資料）を確認してそれらが活用できるようにリストを作成すること、などであった。教育運動史の研究（「新興教育運動」の研究）はこういった状況から出発したのである。

資（史）料の点からいうと、「懇話会」時代に為し得た「新教」の機関誌『新興教育』等の発掘とその「複製版」の刊行（1965年10月～1967年8月）が大きな画期を為すものであった（その状況と、『複製版』全九巻の中身については本小論の前号「教育運動史研究のあゆみ（中）」で述べてある）。この出版は大変好感を持って迎えられ、これによって「資料に裏づけられた研究」が本格的にスタートすることになった。それから10年後（1975年4～12月）2回目の複製刊行が行われた。前回の時には新教懇話会が中心になって新興教育複製版刊行委員会を組織しそれが発行所となって事実上「自費出版」（自主出版）の形であったが、今度は教育運動史研究会が中心となって「復刻版刊行委員会」を作って事業を進めたことは同じだが、白石書店が発行所となって印刷・製本から販売・集金に至るまでの実務に責任を持って当るといったところに大きな違いがある（いわゆる「市販」の形。それで刊行委員会の役割は企画・編集と会員への広報・宣伝・購入申し込み受付とその分の集金などといった活動に限定することが出来た）。

出来上がった書籍は、丈夫な表紙のついた箱入りの上製本であって、前回のものとは比べ物にならないほど立派な装丁がしてある（全7巻プラス別巻）。また収録文献についていえば、一番基本になる「新教」の機関誌（同時に教員を主たる対象とした教育雑誌）『新興教育』（全17冊、発行所 新興教育研究所、発売所 自由社）と新興教育同盟準備会になってからの機関誌（いわゆるプリント版『新興教育』3冊、発行所 同 準備会）は前回同様「原本」どおりの内容で完全復刻されている。そして、前回には「複製版」の中に入れられず独自の発行となった『ピオニールトクホン』第一輯、第二輯も、今回は縮刷して「別巻」の中に収められている。その他、前回以降に新たに発掘された貴重な資料が第7巻と別巻に収録されている。そのような新資料は、以下のとおりである。

復刻版第7巻（1975年10月刊）所収

- ① 『新興教育同盟準備会ニュース』No. 7（1933.2.1.）

月間であったが他の号は未発掘。

- ② 新興教育研究所機関紙『教育新聞』第二号（1932.6.10.）、第三号（改訂版、1932.7.28.）

月刊、第七号まで発行されたがこれら以外は未発掘。「改訂版」というのは元のもの
のを警察に押収されたので新たに組み直して発行したもの。

- ③ 日本教育労働者組合本部機関紙『教育労働者』1931.2.11. 号
- ④ 全協・一般使用人組合教育労働部機関紙『教育労働者版』第5号（1932.1.2.）～第8号（1932.3.1.），第三〇号（1933.1.30.）
- ③，④ともこれ以外は未発掘。

「別巻」（1975年12月刊）収録文献

一、ピオニール教材

- ① 全国農民組合青年部教育出版部（編集）発行
『全農ピオニール夏期教程』下級用・上級用（1931.8.10.）
- ② 新興教育研究所出版部（編集）発行
『ピオニール トクホン』第一輯（1932.2.10.），第二輯（1932.3.20.）
『ピオニールの友』第三輯（1932.5.17.）〔註〕『ピオニール トクホン』を改題

二、「教労」「新教」長野支部機関紙誌

- ③ 全協日本一般使用人組合教育労働部長野支部・書記局ニュース類
『書記局ニュース』第一号（1932.5.16.），以後『教労長野支部ニュース』→『教労長野支部書記局ニュース』→『教労書記局ニュース』→『教労対策部ニュース』と紙名変更して第十一号（1933.1.8.）まで。最終の『教労長野支部ニュース』第十二号は「原稿」のまま。
- ④ 新興教育長野支局ニュースと機関紙類
『新教教育支局ニュース』第2号（1932.11.），第3号（1932.11.），*第一号は欠。
『信濃教育』第一号（1932.2.15.）から途中「特別号」をはさみ十二月・一月合併号（1933.1.）まで合計9号。
- ⑤ 地方版・地区ニュース類
『信濃教育諏訪版』第一号（1932.6・15.），第二号（1932.7.16.）
『下伊那地区ニュース』第一号（32.12.10.）～第三号（1933.1.28.）
『×××地区 革命記念 特別ニュース』（1932.11.7.）
『教育時報』第二号（教育時報社，1933.1.30.）
- ⑥ 長野支部・教育パンフレット類
「唯物論は認識論上維持されないか」ほか13編

これらの新資料はいずれも大変貴重なものであるが，その内「別巻」の後半部に収録されている長野支部関係の諸資料は全体で223ページにおよぶ膨大なもので，これまでの新興教育運動の研究においてこれだけまとめた「原資料」（第一次資料）が一挙に発掘されるなどということ

は全く例が無かった。また、この運動の資料については前述したような状況にあったから、こういことが起こるなどということをも想像することさえ出来なかったのである。その後これらの資料の発掘が契機となって進行中の復刻版刊行事業の中に急遽組み込まれ「別巻」として刊行されるようになったのであるが、そこに至るまでの経緯およびそれらの資料の持つ意義について井野川さんが『教育運動史研究ニュース』No. 26 (1975.11.15.『別巻』刊行について) に書いてあるので、以下それを参照しながら若干のことを記しておきたい。

それによれば、この資料の存在を「研究会」の井野川さんに連絡してきたのは、会員で新潟県在住の向山猛夫さんである。そして向山さんは、それを、『教労』『新教』創立45周年記念夏季研究集会(第10回夏季研究集会、1975年8月25～26日)第一日目終了後の「懇親会」の席に持参して出席者(40名余)に披露したのであった。その資料類は総てわら半紙に謄写版印刷(ガリ版印刷)という長期の保存にはむかないものばかりであったので、なおさらのこと一同は「何故こんなことがあり得たのか?!」という驚き(あわせて感激)の感に包まれたのであった。まさに研究史上「奇跡」的な出来事であったといつてよい。その向山さんの説明によれば、これらの資料を保持していたのは元々は「2・4事件」の担当裁判官(長野地裁)であった石田弘吉氏だったとのこと。そしてその死後それを保管していた子息弘正氏(当時、東京・菊華高校長)から友人であった向山さんの弟・寛夫氏(当時・国学院大学教授)に譲り渡されたものであった。そこで井野川さんらは膨大な資料の中から長野支部関係のものが「ごっそり一括りされてある」のを見出し、程無く寛夫氏の「快諾」を得て、その「資料公開」「復刻頒布」することにしたのであった。当時、「教労」関係文書は中央の機関誌紙さえ今回の復刻版第七巻に収録された物以外は「未発掘」で、「地方支部」の機関紙誌類は「一つも発掘されていない状態」であっただけに、この史料類の持つ意義は大変大きかった。これによって、「全国で最大の(地方——柿沼補充)組織であった長野支部」の「活動の全貌が史料に裏付けられて全体的に明らかになる」のは勿論のこと、そればかりでなく、「中央」の「活動方針」が「地方」で如何に具体化され「実践」されていったかというこれまで「不明瞭であった」ことが「これに基づいて類推したり、調査研究を進める手掛かり」が生まれたということでもある、からである⁽²⁾。ところで、これほど大きな意味を持つ史料であるが、その後の研究で参考にされ、部分的に利用されることはあったものの、それを正面から全面的に分析した研究成果は生まれていない。新興教育運動史研究上の課題の一つとして残されたままになっている⁽³⁾。

4 「教育運動史研究資料」の発行——運動の基本史料の複製と重要論文を掲載

さて、新興教育運動関係の資(史)料の発掘・普及という点では何といつても2回にわたる「複製版」「復刻版」刊行の持つ意味が大きかったが、「運動史研」が取り組んだ事業はそれ以外にもいくつかある。

「新教懇話会」時代の「複製版」刊行事業の成功でこの面でのノウハウを身につけ、確信を深

めた「運動史研」は、『『新教』創立・『教労』四十周年記念夏季研究集会』開催（1970年8月）の翌年、「教育運動史研究資料」を刊行することになった。編集発行人 井野川潔、発行所 教育運動史研究会、「刊行のことば」によれば、「一九三〇年代に、プロレタリア階級運動の一環としてプロレタリア教育研究運動と教育労働者の教育労働者組合運動とが成立展開」したが、「その資料・文献」は「弾圧抑収にあったため、戦中・戦後をとおして一般には入手困難であった」、そこで「教師、学生、父母の皆さんのサークル、ゼミ、集会などの学習に使われるよう」「その運動の基本資料を、さきの雑誌新興教育復刻版（複製版の誤り——柿沼）の経験をとおして、シリーズの編集計画をたてて順次刊行していく」というのがその狙いであった。これを見ると企画段階ではかなりの数の文献を出すつもりであったことがうかがわれるが、実際には次の3冊だけが刊行されたのである⁽⁴⁾。

1冊目（No.1）の『新教・教労の教育運動の組織基本文書』（1971年9月1日発行）では、「新興教育研究所創立宣言」、「日本に於ける教育労働者組合運動について」（「渡辺良雄」署名の個人論文という形をとっているが、実際は「教労」の「結成宣言」であり「綱領」であった）をはじめ、七つの、この運動にとっての基本中の基本文献が「すべて原本によって原型のまま複製」され、読む者の理解を助けるために森谷 清さんの〈解説〉が付されている。

2冊目（同年9月10日発行）は「この教育運動史研究の未開拓分野の『無産者託児所運動について』最新の基礎的研究文献をまとめ」（No.2の「刊行のことば」）たもので、冒頭に井野川さんが1970年初夏に北関東保育問題研究会の総会で行った記念講演の要約が掲載されている（「百合子の『乳房』と荏原託児所の保母たち——戦前、無産者託児所の伝統について——」、北関東「保問研」発行の冊子、1970年6月）。そのあとに『新興教育』誌1932年3月号掲載の「無産者託児所での『母と保母の座談会』」の記録、そして最後に「運動史研」機関誌『教育運動史研究』13号（1971年10月）に載った勅使千鶴（日本福祉大学）「無産者託児所運動について」がそのままの形で収録されている。この勅使論文の構成は、はじめに、1、無産者託児所の成立過程、2、無産者託児所の教育運動（（1）施設・設備・運営（2）教育実践（3）保母と父母との提携）、3、無産者託児所の崩壊、おわりに、から成っているが、その大きな特徴は先行研究等に頼りきらず、自ら（一部は、卒論でこの問題に取り組んでいた和光大学学生の協力を得て）資料の発掘、当事者からの聞きとり調査⁽⁵⁾などを精力的に行い、無産者託児所の実態をはっきりさせたことである。こうして、以上の3論稿を収録したこの冊子は、以後のこの研究にとってまさに「基本資料」ともいうべきものになったのである。ただし、会員内で頒布されたものであり、またわが国では保育史の研究者がそう多くないこともあって、その後どのように活用されたかは定かでない。

3冊目（No.3、1972年8月24日発行）は平野義太郎さん（日本平和委員会）執筆の「教育労働者組織の国際的団結と教育——エドキンテルンの活動の歴史（一九一九年創建から一九三〇年まで）——」を掲載したもので、それに「付録」として花井 信「エドキンテルン機関誌に紹介された日本の教育運動」と土屋基規「エドキンテルンと日本の教育労働運動についての略年表」

が収録されている。平野論文の対象となっている「エドキンテルン」というのは、第一次世界大戦後に結成された教育労働者の国際組織（本部はパリに置かれていた）のことで、エスペラント語 La Interacio de Eduklaboristoj (Eduk-intern) の略称である。フランス語では Internationale de travailleurs de l'enseignement, 英語では Education Workers Internatinal (EWI), ドイツ語では Internationale der Bildungsarbeiter と記され、日本では「教育労働者インタナショナル」と呼ばれた。平野さんのこの論文は題名にあるとおりその「エドキンテルン」の歩みについて述べたもので、全体は以下の三つの章から成っている

第一章 教育労働者インタナショナルの創建

第二章 プロレタリア的見地からする教育学

第三章 迫りくる戦争とファシズムに抗し、たたかう学校教師 世界恐慌の発展と教育・ファシズムの危険の激増 第六回国際大会（1930年アントワープ）をめぐる

平野さん（当時・東大助教授）は、この国際組織が1928年4月にドイツのライプチヒで開いた「国際教育デー」の会議に参加し、「ドクトル オキ」の名で「極東に於けるプロレタリア児童」と題する報告を行っている（この会議の「記録」が、1931年5月、『新興教育学』という書名で刀江書院から刊行されている。なお、「エドキンテルン」とこの書については後の項でやや詳しく述べることにしている）。その時の模様を記した論稿が「エドキンテルン・ライプチヒ会議に参加して」で、『日本教育運動史』第2巻（三一書房、1960年9月）に当事者の体験した「記録」の一つとして収録されている（前記『嵐の中の教育』に再録）。「研究資料」No.3の平野論文は、厳密な意味ではNo.1とNo.2の「刊行のことば」にあるような「戦前」の運動の中で記された「基本資料」とはいえないが、この方面での研究にとっては欠くことの出来ない重要文献であるので、会員に広く読んでもらうためにこのような措置がとられたのであった。このようなこともあって、「研究会」は同時期に開かれた「第7回夏季研究集会」（1972年8月24～25日）に平野さんをおよびし、冒頭の記念講演で「教育運動における国際連帯——エドキンテルン大会に出席したころ——」と題する話をしてもらったのであった。この講演の記録は『教育運動史研究』第15号に掲載されているので、合わせて読むと理解が一層進むのではないと思われるのである。

ところでこの「研究資料」は、「刊行のことば」に「シリーズの編集計画をたてて順次刊行していく」という一文があるところからも分かるように、かなりの数のものが発行されるのではないかと予測されたのであるが、前記したように結局No.3迄で終わっている。それは何故か。正確なことは分からないが推測してみると次のような事情があったのではないと思われる。即ち1972年には機関誌『教育運動史研究』が装いを全く一新して、しかも年1回ではあるが9月1日付けで定期刊行されるようになったこと（第14号から）。それにともない編集兼発行人である井野川さんの仕事が著しく増加し、「研究資料」の刊行にまで十分意を用いることが出来なくなったということである。念のためにいえば、機関誌編集において井野川さんの過重負担をいくらかでも軽減できるようになったのは編集委員会体制が出来た1976年7月の『季刊教育運動研

究（改題・教育運動史研究）』の創刊以後、特に常任編集委員会体制が確立した第5号（1977年7月）以後のことである。

5 「新興教育基本文献集成」の発刊——運動に重要な役割を果たした「古典」的名著の複製

この「原資料」の複製・普及という点で「研究会」が行ったもう一つの重要な活動は、「教労」「新教」結成五十周年にあたる1980年にとり行われた「新興教育基本文献集成」の刊行である（編者・新興教育復刻版刊行委員会責任者井野川潔、発行所 白石書店）。前年（1979年）の4月に『教育運動研究』が第10号をもって休刊のやむなきに至り、以後1年にわたって機関誌を持たない苦境の時期を乗り越えての取り組みであった。この年の8月の「第15回夏季研究集会」とともに「五十周年」を記念する活動でもあったといってもよい。それだけにこの取り組みに対する「集中力」も大変大きなものがあり、5月から9月にかけて一ヵ月に一冊ずつ予定通り計5冊が刊行されたのである。また、「新興教育復刻版」刊行終了後3年以上経っているのに、編者として復刻版刊行委員会の名が記されているのは、当事者の「証言」の蓄積と共に「資料」の発掘・蒐集・公開・普及という活動がこの「研究会」にとって一貫して欠くことの出来ないものであるという意識のあらわれである。

以下に記す5冊がその文献である（原本発行順、末尾の四角で囲んだ数字は複製版発行順）。版型（四六版）を含めて内容的には一切変更を行わず、原本どおりに作成されている。が、表紙の次に「凡例」が加わっているところだけは新しく付け加えられたものである。

- 1 山下徳治『新興ロシアの教育』鉄塔書院、1929（昭和4）年12月発行 [1]
- 2 本庄陸男『資本主義下の小学校』自由社、1930年10月 [5]
- 3 国際教育労働者聯盟編・浅野研真訳『新興教育学』刀江書院、1931年5月 [2]
- 4 浅野研真『プロレタリア教育の諸問題』厚生閣書店、1931年9月 [3]
- 5 池田種生『動きゆく社会と教育の展望』現代教育社、1932年7月 [4]

ここに掲げられた緒著作は、「教労」や「新教」の結成に至る過程で、またその運動の発展の上で大きな影響を与えたいわばこの運動にとっての「古典」とでもいってよいようなものばかりである。但し、本来なら池田さんの著作の中では『日本教育界暴露記』（自由社、1930年11月）が取り上げられるのが至当なのであるが、同書は既に紹介した「新樹叢書」の中の一冊として刊行された『プロレタリア教育の足跡』の中に「資料」として全文収録されているので、この「集成」ではそれに代わって上記の著作が採用されたのであった。なお、ここに名を連ねている4人の内山下、浅野、池田の三氏はいずれも1890年代生れで、当時まだ20歳台（1900年代生れ）であった本庄さんや前記の山口、増淵、小田さん、あるいは教育運動史研究会の責任者である井野川さんなどこの運動に参加し活動した人たちを指導・援助しながら、自ら運動の「表面」に立ってその推進のために尽力した方々であった。それ故に若手の活動家たちはこの3人を、まだ

30歳台であったにも拘らず、敬意を込めて「長老」呼ばわりしたという逸話が今日まで語り伝えられている。

『新興ロシアの教育』（山下徳治）著者山下さんは1892年1月鹿児島県徳之島で生れた。1913年3月鹿児島師範学校を卒業し、4月から鹿児島市内の小学校に勤務。1920年、同郷の先輩である小原国芳主事に見込まれて、東京の私立成城小学校（当時の成城小は「大正新教育」の学校として全国的に名が通っていた）に移った。そこでの算数教育を中心とした山下さんの教育活動が沢柳政太郎校長に高く評価され、成城校の初めての留学生としてドイツのマールブルク大学でペスタロッチの研究に従事している（1922年から5年間）。その間にデューイの著作に接し、その思想に深く共鳴するようになり、そしてデューイがそうしたように、革命後のソビエト訪問を実行に移したのであった（のちの、1930年10月、山下さんはデューイの『ソヴェートロシア印象記』を翻訳し、自由社から出している）。帰国して間もなく沢柳校長の死に遭遇し、また成城の「新教育」に限界も感じて、翌年（1928年）自由学園（羽仁もと子経営）に転じる。そしてこの年二度目の渡欧の際に約1ヵ月半にわたってソ連に滞在し、社会主義国家建設期のソビエト教育の実状をつぶさに見学して改めて深く感動、そこで進められているその成果を日本に紹介するために本書を執筆したのである。また、同時に、とりわけその中にある「新興教育の出生」や「新興教育の根本原理」（「新興教育の社会性」「新興教育の現代性」「新興教育の階級性」）などの論文を通してこれからの日本の教育・教育運動の目指すべき方向を指し示すことに意を用いたのであった⁽⁶⁾。全体の構成は次のようであった。

序 緒言 教育の三部局 新興教育の出生 新興教育の根本原理 教育界の先達
ソヴィエトの教育方針 ソヴィエト教育行政機関 ソヴィエト教育機関 ソヴィエト
教育の方法 跋（「あとがき」のこと——柿沼）

この中で示された教育観、教育運動観は当時教員組合の結成を目指していた進歩的な若手教員たちに大きな刺激を与え、1930年の「教労」や「新教」を結成する機運を醸成する一つの契機となった。山下さんが新興教育研究所の初代所長に就任し、また日本教育労働社組合設立の中心人物の一人として活躍したのは、この書に示された考えや思いがその底にあったからである。

1930年12月、朝鮮の「新教」支局準備会（責任者・上甲米太郎）が弾圧される。この時、山下さんはその活動を指導していたということで検挙され、京城へ連行・拘留されてしまう（31年8月予審を終え保釈されて帰国）。この法廷闘争は32年6月にいったん勝訴するが、上級審の判決で結局「懲役2年執行猶予5年」になってしまった。また「新教」も厳しい弾圧体制の下で、32年8月に新興教育同盟準備会へと改組、その執行委員長に池田さんが着任した。こういった状況で山下さんが表立って活動することは著しく困難となり、次第にこの運動から離れていくことになった。そして、生活のためもあって岩波書店発行の雑誌『教育』（1933年4月創刊）の編集部に入り、1937年5月の「教育科学研究会」結成に際しては城戸幡太郎、留岡清男氏らと共に中心的な役割を果たしたのであった。39年ごろには病気などのためその運動からも身を引

くようになるが、太平洋戦争（アジア・太平洋戦争）の末期44年6月には再び特高警察によって検挙・投獄されている。

『資本主義下の小学校』（本庄陸男）次に本庄さんであるが、本庄さんといえば「戦前」のプロレタリア文学運動の中で活躍した作家として知られている。短編「白い壁」（『改造』1934年5月号、のち短編集『白い壁』に収録、ナウカ社、1935年6月）と長編『石狩川』（大観堂書店、1939年5月）がその代表作である⁽⁷⁾。しかし作家として「自立」する以前は、新興教育運動（その前史以来）の中で中心的な役割を果たした一人でもあったのである。

北海道出身であるが、1925年に東京府立青山師範学校を卒業し、当時東京一の名門校といわれていた本郷区（現・文京区）^{せいし}誠之小学校に勤務。1927（昭和2）年4月に同窓の文学愛好教師たちと共に「義足同人」を組織（5ページの「教労」・「新教」の組織変遷図にあるようにこれが新興教育運動前史における最初の教員団体）して創作活動を続ける一方、教員組合結成の運動の中心になって活動したのである。29年4月、名門校からの転出を希望して深川区（現・江東区）の明治小学校に転任し、「特殊学級」を担当する。この時に出会った子どもたちの現実とそこでの教育活動を通して本庄さんは「無産児童」や「低劣児童」（「精薄児」、学力遅滞児）の問題を自覚し、そこに「資本主義下小学校」の矛盾が集中的に現れることを認識したのであった（この体験ののちに名作「白い壁」を生み出す元になった）。しかし本庄さんの教員生活はこの貴重な体験の最中に途絶えてしまう。1929年末から翌年1月にかけての小学校教員連盟への弾圧で佐野五郎、上田唯郎さんらと共に検挙され、続いて3月には東京府学務課の行政処分によって佐野、山口近治、増淵 稔、町田知雄さんらと一緒に免許証褫奪、免職処分に付されてしまったからである。新興教育運動（の前史）における最初の「犠牲者」であった。

この書は、「自序」の冒頭にあるように「二つの階級の対立は、ブルジョア教育の欺瞞を、白日の下に曝け出した。プロレタリアは、今や、彼自身の教育を建設せんとしつつある」という状況認識に基いて、それまでに書いた教育や学校の問題に対する鋭い批判や問題提起（「未知なる同志への呼びかけの言葉」）を一冊にまとめ、「更に全国の同志との結合の機縁とならんことを希つて」出版された本庄さんの唯一の教育論集である。雑誌『新興教育』の発行元である自由社から刊行されたが、発売禁止処分に付されてしまった。全体は3部から成り、以下のような諸論稿が収められている

- I 資本主義下の小学校 無産児童教育 低劣児童の問題 少年組織と教育者
新興教育の根ざすところ
- II 童謡の問題について 特別加俸の土地 文学に現はれたる教員の顔
- III 教員層の現在 減俸案と教員層 教員俸給問題の反映

本庄さんは、1930年8月創立の新興教育研究所の中では、創立委員、中央委員、書記局員、農村研究会責任者として活躍する。が、翌年5月、上田庄三郎さんの編集する雑誌『観念工場』に執筆（「教育の新しき出発」）したことを批判され、その責任をとって研究所中央委員を辞任す

る。そして、それ以後は執筆活動に従事しながらプロレタリア作家同盟などの活動に力を尽くすようになっていった⁽⁸⁾。

『プロレタリア教育の諸問題』（浅野研真）3冊目の『新興教育学』については後述することにして、ここでは順序を入れ替えて、先に浅野さんと池田さんの著書について記すことにする。

『プロレタリア教育の諸問題』の著者である浅野研真さんは1898年7月愛知県生まれ。僧籍を得て、1919年北海道函館刑務所の教誨師となったが、やがて犯罪と社会学の研究をするために退職。上京して日大文学部社会学科に入学、さらに高等専攻科に進学・卒業して母校の社会学研究室の助手となった（1925年4月）。他方、その少し前に開設された東京労働学校で教務主任としてその経営・運営に当たっている（1927年9月の閉鎖時まで）。また、1928年6月から30年3月まで文部省からの派遣でフランス（パリ大学）に留学。その時「教文協会」が「エドキンテルン」へ加盟するための仲介の労をとったのであった。帰朝後はかつて発表した教育に関する諸論稿によって職場を追われる⁽⁹⁾ ことになり、また一切の官職にも就かず（就つげずに）文化運動、教育運動の中で力を尽くすようになった。そして、旺盛な教育論文の執筆活動もあって、「社会科学の裏づけのある教育学者」として名を成すようになっていった。

新興教育研究所では、前記したように山下、池田さんと共に「表面」に立ち創立委員、中央委員に就任したほか、成人教育研究会、教育科学研究会、教育制度研究会を担当し、また「新興教育講習会」の講師や、「プロレタリア教育展」の責任者としての活動もしている。他方、執筆活動なども活発で、雑誌『新興教育』にはたくさんの論文が掲載されている。特に1930年12月に浅野さんの翻訳・編集によって出版された『マルクス主義と教育問題』（発行所・自由社）はさほど分厚なものではない（四六判186ページ）けれど注目に値する文献である。そこでは、マルクス、エンゲルス、レーニンなどのマルクス主義者の教育思想が整理されて紹介されており、この種のものとしてはおそらくわが国最初のものといえるからである。全体は以下の五部から成っている。

- | | |
|---------------------|----------------|
| 第一部 マルクス及びエンゲルスの教育論 | 第二部 レーニン主義教育論 |
| 第三部 プロレタリア児童の問題 | 第四部 ソヴェート教育の建設 |
| 第五部 教育労働者運動 | |

なおこの書ははじめからかなりの伏字（××で表記）が用いられているが、それでも出版されるとすぐに発禁にされた。翌年3月改訂版が出されるが、そこでは「多くの削除のメス加へられねばならなかった」⁽¹⁰⁾（「改訂版への小序」より）。

『プロレタリア教育の諸問題』は『新興教育』誌をはじめいくつかの雑誌などに掲載された数多くの教育論文の中から選り抜かれた33編で編成されている。浅野さんの唯一の教育論集である。この書について浅野さんは、「序」の中で、教育の問題が「一定の社会科学の立場から取扱われ、論評されている点」に「本書のレーゾン・デートル（存在理由・存在価値——柿沼）」があると述べ、同時に「教育闘争の科学的展開は、正に之れからのことに属する。吾々は闘争を通

じて、吾々のプロレタリア教育科学の建設に努力しなければならない」と主張している。そして最後に「本書の如きは、正にそのための一砂礫」と記している。ここには新興教育＝プロレタリア運動に携わる一員としての浅野さんの意気込みとその誠実な姿勢とがよく示されている、とあってよい。全体の構成は「前篇」と「後篇」から成り、1928年のフランス留学以前に書かれたものと1930年の帰国後に執筆されたもの、ということで分けられている。「教育の利潤」と題された「前編」は同名の論文（浅野さんが書いた最初教育論文、初出は『ソシウス』第三号、1927年12月）以下、「大学の自治は可能なりや」、「教育の社会的暴露」、「教育政策批判」、「労働者教育の国際化」など合わせて14本の論文が収録されている。「後篇」は「プロレタリア教育の諸問題」と題され、雑誌『新興教育』に掲載された諸論文を中心に次の19論文で編成されている。

プロレタリア教育の基礎問題 教育目的の一考察 左翼論陣と教育戦線 明日のプロレタリア教育 郷土教育の反動性 郷土意識と階級性 国民学校案の吟味 インテリ
の失業と現代教育の破綻 世界経済恐慌と教員失業 教員俸給問題批判 教員組合
の結成へ エドキンテルンの活動 エドキンテルンと反戦闘争 世界的に醒めつつあ
る女教員 教育上のロバート・オーエン 巴里コンミュン治下の教育 フランスのピ
オニールは闘ふ デューイのソヴェート教育観 ソヴェート小学校の国語教育

これを見れば分かるようにここには実に広範な教育の問題に対する浅野さんの追究ぶりが認められる。「社会科学に裏づけられた教育学者」としての視野の広さ、見識の豊かさがよく示されているといってもよい。勿論、「論文集」であるということもあって系統性や体系性という点では不十分さを免れていないが、「教育の階級性」や「教育の上部構造的役割」を現実^{じか}に即して明らかにするという「マルクス主義教育学」の理論として、新興教育＝プロレタリア教育運動を推し進めていった人たちの関心を集めたのである。本書もまた前記の『マルクス主義と教育問題』同様、当局の手で発売禁止処分に付されてしまった。

1932年8月、「新教」は新興教育同盟準備会へと組織的転換をするが、この時浅野さんは準備委員会の委員には選任されているものの執行委員会のメンバーにはなっていない。この頃の浅野さんの主たる関心が再び仏教の方へと向かい、「社会変革と宗教」の関係に大きく傾斜していたからである。以後の浅野さんは次第に社会事業家、仏教社会学研究者として名を成すようになった。しかし、かといってその「批判精神」は最後まで失われることがなかった。既成の教団が、国家の手にとりこまれ完全に国民の「思想統制」、「精神的慰撫機関」化されていく中で、それに対する批判を一貫して保持し続けたのであった。

『動き行く社会と教育の展望』（池田種生） 前記したように池田さんが新興教育時代に出版した代表的な著書は『日本教育界暴露記』（自由社、1930年11月）である。この書は、池田さんが教育ジャーナリスト（『教育週報』記者など）という立場を活用して直に^{じか}触れることの出来た事実や、「教育労働者」から「提供された」り「教育界に精通する人びと」から得た情報などを

もとに、それらを分析して、「ブルジョア教育」の「仮面を剥ぎ、その機構を解剖し、その現実を具体的に暴露せんとした」ものであり（「」内は「序」からの引用）、そうすることによって教員大衆の自覚を促し「教労」・「新教」への結集をはかることをねらって執筆したものであった。筆者名には池田さんがこの運動の中で常時使用していた「野上壮吉」が用いられている。

全体は以下の7章から成っている。

- 一 現代教育の役割
- 二 転向せしめた教育内容
- 三 教育界機構の内面
- 四 教育内容を繞る^{めぐ}堕落相
- 五 私設教育諸団体の解剖
- 六 新教育思潮と新学校
- 七 教育労働者の現実

この書については、教育運動史関係の「書誌」研究者として知られる木戸若雄さんが「現実暴露の書」といってよく、「教育のあらゆる面の皮をはぎとる。教員大衆の開眼にはもってこいの書であるが、惜しくも発売を禁止され、改訂版は伏字だらけになった」（『『新興教育』の周辺——プロレタリア教育書誌——』、『『新興教育』複製版月報』第4号、1966年1月）と記している。前半の部分は全く同感であり、「発禁」にされたことは私も承知しているが、「改訂版」については遺憾ながらそれを手にしたことがない。したがって、どの程度「伏字」になったのかは私には分からない。

『動きゆく社会と教育の展望』は、1928年2月から1932年4月までの間に「池田種生」名で発表（一部未発表を含む）された論稿を「年代順」に整理して「一冊にまとめた」（同誌「序にかへて」より）教育評論集である。内容的には『暴露記』より前のものが大半であるが、出版されたのは『暴露記』のあと、1932年7月であった（出版社は現代教育社）。その構成を見ると、全体が5編で編成され、各編にはそれぞれ5～8本の論稿が配置されている。

第一編 現代教育上の諸問題

入学試験問題と少年職業問題 教育者に忘れられたる一方面 等8篇

第二章 動く^(ママ)教育の展望

教育界の動向をみる 最近に於ける教育界の思潮とその社会的批判 等5篇

第三章 教育的時事問題批判

「教育時事問題」は何を教へるか 第五十八議会に於ける二つの教育問題 等7編

第四章 提唱と駁論

校長公選制の駁論に答ふ 教員は労働者か 等5篇

第五章 Penは走る

学校奇談（一） 学校奇談（二） 等7篇

これらの論稿は、「本名」（当時、そして「戦後」も、ほとんどの人がそう思っていた。実際の本名は胤夫）で書いたものなので、表現上や論旨の展開においていろいろな配慮が為されており、そのため「もう一息といふところまでつっこんで」いえていないという感じを確かに持つ（『暴露記』に比べてのことであるが）。しかし池田さんが少し謙遜して書いているように「他の人に比べて比較的言ひ易い立場にあるのと、その根本を見て、それを出来るだけ正しく伝へやう

とした私の努力は、ある程度まで、現れてゐる」（「序にかへて」より）ということは間違いない。ジャーナリストの立場を最大限活用し、事実在即して日本の教育の矛盾や問題点を解明・論評することを通して、「新教」運動の活動家ばかりでなくより広範な読者、特にその運動の一回り外側にいる人たちに対して、こういった問題に目を向け、考えてみることを促したものだ、ということが出来る。その意味で、この書の出版は直接的ではないけれど「教労」や「新教」の運動に貢献するものであった。

『新興教育学』（国際教育労働者連盟編、浅野研真訳）この書の冒頭に「新興教育研究所」名の「訳序」という短文が載っている。私自身はこの「訳序」という言葉に接した記憶がないが、翻訳・出版に当たっての「序文」とでもいうべきものであろう。何故この文にこだわるのかといえば、次のことからである。即ち、従来この文献が紹介ないし活用される際には、ほとんどの人たちが、無意識の内に単に「浅野研真訳」とのみ記してきた。そしてそのことは「奥付」にそう記してあることから間違いではないのだけれど、それだけではこの書の刊行が「研究所」の事業であることがキチンと見えてこない。この本の出版は浅野さんの個人的活動ではなく、その末尾に「本訳書は主として所員浅野研真の担当によって成ったものである」という「付記」にあるように、あくまで「研究所」の活動の一環であって、その任に浅野さんが当たったということ。「教育運動史研究」では押さえておく必要があるからである。

その「訳序」の冒頭にあるように「本書は教育労働者インタナショナル（エドキンテルン）の主催で、一九二八年の春、ドイツのライピヒ（ライプチヒの誤植であろう——柿沼）に於いて開催された国際教育デーの輝かしき収穫を、エドキンテルン総務書記局自身の手によって編集し、仏・独・西の三ヶ国語で出版した『プロレタリア教育学』を翻訳したものである」（四六版、400ページ）。全体は次のような構成になっている。各編に収められている報告にはそのあとに国名と報告者の氏名とが記されているが、その氏名の方は省略する。

序文（総務書記局）

総務書記局の挨拶（ヴェルノーシェ）

教育書紀の開会の辞

第一編 プロレタリア児童の状態

- (A) プロレタリア児童の物質的状态（ドイツ） (B) プロレタリア児童の心理的状态（ドイツ） (C) プロレタリア児童と法律（ギリシャ） (D) 極東におけるプロレタリア児童（日本） (E) ソヴェート同盟及び資本主義諸国に於けるプロレタリア児童の社会的並びに法律的地位（ソ同盟） (F) 討論 (G) 討論の終結

第二編 教育の目的

- (A) 学校と社会（ソ同盟） (B) 学校と国家（ソ同盟） (C) 学校と宗教（ドイツ） (D) 教育の目的（ベルギー） (E) 教育の目的（イギリス） (F) 同土ピンケ

ヴィッチ（ソ同盟）の参加

第三編 学校制度の組織

(A) ドイツに於ける学校制度の組織（ドイツ） (B) ソヴェート同盟に於ける国民教育制度 (C) 討論

第四編 教科科目と教授法

(A) ソヴェート初等学校の理論的基礎と組織（ソ同盟） (B) 初等学校（ベルギー）
(C) スウェーデンの教科科目（スウェーデン） (D) ドイツに於ける労働学校

第五編 生徒間の訓練

(A) 生徒間の訓練（フランス） (B) 学校における訓練（イギリス） (C) 学校自治体（ドイツ） (D) 討論 (E) 討論の終結

閉会の辞

新興教育研究所はこの書を「今日、プロレタリア教育学に関する限り、この国際的共同労作以上のものを持たないと云っても良からう」（「訳序」より）と評価し、また、前記池田種生さんは、「故・浅野研真君を語る——思い出すまゝ（4）——」（『「新興教育」複製版月報』第6号、1966年4月）の中で「この訳書は、現在でも高く評価されてよい労作であろう」と書いたうえで、「当時の教育労働者にとって、必読文献の一つで、その意識をたかめ、教員組合の運動を推し進めていく上にもおおきな力となったものである」とその果たした役割がいかに大きかったかを記している。なお、ついでに記すと、先の「訳序」のところでこの書の刊行が運動の一環として為されたものであることを述べておいたが、それと関わることで、次のように書かれていることも重要である。「勿論、吾々の任務は、常に本書よりの一步前進にあることを忘れてはならない」と。ここには「新興教育研究所創立宣言」に見られる「当面の階級的任務は……新興教育の科学的建設とその宣伝である」の精神が生きて働いていることを見て取ることが出来るからである。

6 新興教育運動と「エドキンテルン」（教育労働者インタナショナル）

ところで、『新興教育学』の元本である『プロレタリア教育学』を編集・刊行した「エドキンテルン」（教育労働者インタナショナル）であるが正式には1922年8月にパリで開かれた「教育インタナショナル」という国際組織の創立から始まる。そして翌翌年（1924年）の8月ブリュッセル（ベルギーの首都）で開催された第2回大会で「規約」を制定し、「教育労働者インタナショナル」（エドキンテルン）へと改称、教育労働者の国際組織であることを鮮明にした。

この「エドキンテルン」を日本で最初に取り上げた論稿が、中曽根源和「教育労働者国際同盟＝無産階級の国際的教育戦線の紹介と所感＝」と山村桃代訳編の「ライブチヒに於けるエドキンテルン大会概要（一）——日本教育者連盟における——」であり、ともに『教育新潮』⁽¹¹⁾ 1928

年6月号に掲載された。前者の中曽根論稿は冒頭で世界には「二種の国際教育運動」があり「一はブルジョア色に染められた国際教育運動」、「いまひとつは教育労働者の教育運動」で「いうまでもなく後者はプロレタリア色をその地色としている」とした上で両者の「本質的差異を明らかに」し、最後を「私は国内的団結を堅くして、国際的無産階級教育戦線にまで進出する日の一日も早からんことを心から切望するものである」と結んでいる。後者の山村論稿は、「無産エスベランチストの国際的団体」の「月刊雑誌 Sennacieca revuo」（3月号）に特集された「エドキンテルン教育週間のプログラム」などと「教育労働者インタナショナル規約」⁽¹²⁾（1924年大会で制定）の全文を翻訳したものである。その「規約」は全九章（23項）から成り、次のような構成をとっていた。

第一章 総説	第二章 教育労働者インタナショナル（パリ）
第三章 教育労働者インタナショナルの事業	第四章 加盟条件
第五章 教育労働者インタナショナルの機関	第六章 会費
第七章 闘争と互助のための国際金庫	第八章 報告
第九章 除名	

その「第一章総説」はいわば「エドキンテルン」の「綱領」とでもいってよいような性格を持つもので、その最後の項目（6）は以下のように記されている。

教育者の闘争は、経済的利益の獲得と、狭い職業的興味とをのみ目ざすべきではない。それは又学校に於ける資本主義イデオロギーの力、主として戦争の偏狭愛国主義的帝国主義的讃美と学校の宗教化とに対する抗争であり、民族や国民性の区別を超越しての労農大衆の団結のためであらねばならない。

教育者の闘争は、凡ゆる教育機関の門戸を労農大衆の前に開くべき教育の合理的変革であらねばならない。それは科学教授の最上なる方法の応用のため、そして、凡ての幼児の養育保育の無料化のための闘争であらねばならない。

この「エドキンテルン」を紹介した二つの論稿は当時の運動関係者（新興教育運動前史）に大いに注目されるところとなった。その点に関して、運動の中心になって活動していた本庄陸男さんが「江頭順二」というペンネームを使って次のように記している（「昭和三年度教育労働運動」、掲載誌は『教育時論』1568号、1928＝昭和3年12月25日号、発行所 開発社）⁽¹³⁾。

この月に於いて、初めて教育労働者なる成語の意義を鮮明にし、それが国際性の問題にまで拡張せられた所に重大な根拠を持つ。山村桃代氏の『ライプチヒに於けるエドキンテルン大会概要』は本邦教育界に、初めて紹介された画期的な文献であった。それは日本の教育運動を、国際的にまで発展せしむるものであり、同時に、世界的なる教員運動の、無産者運動への結び付きによって、重大なるセンセーションを起こしたのである。

こういった状況の中で教育文芸家協会は、松永貴平さんが担当して、留学中でパリに在住していた浅野研真さんを通じて「エドキンテルン」への加盟を申請する。そして、教文協会へと改変した後の1929年8月その加盟が承認されたのであった。そのころの様子を『教文協会ニュー

ス』⁽¹⁴⁾（発行年月日や号数の記載がないが、他の記事との関係で1929年9月の後半か10月初めのころのものではないかと推定される）は「国際的進出の第一歩は 歩み出された」と題して、次のように伝えている。

吾々は嘗てE・W・I（「エドキンテルン」の英語名の略称——柿沼）、への加入を決議し、即時加盟をなした。E・M・Iは満腔の熱意を以て、吾々の加入を歓迎し、レポの交換、連絡は遠隔にも不拘なされて居る。最近是在仏の同志によりて更に具体的な問題が取り上げられ吾々の環境の調査を依頼して来た。

吾々にとっても各自の細密な情勢の正確なる調査は必要だ。

即時環境の情勢を調査してレポをどしどし送れ!!

この小文を読むと、当時の人たちの国際的な教育労働者への仲間入りが出来たことへの喜びとそのころの活動の一端をうかがい知ることが出来るような気がするのである。

また、1930年8月に「準備会」を発足させた日本教育労働者組合も11月の正式結成（創立大会）の折に「綱領」「運動方針」などとともに「エドキンテルン規約」を採用することを決定している。その「教労」の中央委員長に着任した山口近治さんは、「戦後」になって当時を振り返って次のように述べている。

われわれが「教労」を結成していく過程でいちばん参考になったのは、エドキンテルンの規約・綱領であった、ということはいえる。それは、たいへん頼りになるものであったしいわばその国際的な教育労働運動の蓄積をわれわれの運動に生かして取り入れた、ということはいえらとおもう。（教育運動史研究会一九六九年度夏季研究集会における山口発言）^{(15) (16)}

こうして、以後も「教労」（そして「新教」も）は、「エドキンテルン」の機関誌の記事（「アピール」や「国際ニュース」欄）などを翻訳し、自己の機関誌紙に掲載するなどして連帯を保持していった（別掲の「資料 エドキンテルン関係文献・論文等一覧」の関係箇所参照）。前記山口さんは、別のところで『「教労版」ニュースでは、時々“国際版”を出していたが、これはエドキンテルンの機関誌“Teachers' International”にのった各国の教育労働者の闘争を翻訳して載せていた。翻訳は教労東京の石田宇三郎君が担当していた」と記している（『非合法教育労働組合運動の追憶』、『教育運動史研究』第12号、1970年5月16日）。もっともここにある『教労版』ニュースの“国際版”というのは今日においても全く未発掘なのでその内容がどのようなのかは分からない。また『教労版』ニュースというのは「教労」が「全協・一般使用人組合教育労働部」になってからその書記局が発行した機関紙で正式には『一般使用人教育労働者版』というが、その発掘されているものだけ（本誌19ページ参照）で見る限り、その中に直接「エドキンテルン」に言及あるいは関係した記事は見当たらない。なお、「教労」時代の機関紙『教育労働者』も1931・2・7発行のものが発掘されているだけ（ここには関係記事はない）なので、全体としてどうなのかは判断できない。他方「新教」の方であるが、機関誌『新興教育』創刊号（1930年9月）に浅野研真「エドキンテルンの活動——教育労働者の国際運動——」、翌年8月号には同「エドキンテルンと反戦闘争」が掲載されているのを初め、ほとんど総ての号で「国際

ニュース」などの欄が設けられ「エドキンテルン」機関紙からの情報を伝えている。これらに目を通すとこの運動の中では確かに教育労働者の国際的な運動との連携・連帯意識がかなり強く働いていたことを確認することが出来る。この点に「新興教育」の運動が「戦前」の他の教育運動とは異なる大きな独自性（特性）を持っていたこと、そして、教育運動史の研究において今なお特に重要視されなければならない理由の一つがここにあることが了解されるのである。もっともこの運動における「国際連帯」は、「エドキンテルン」の活動から学びそれを参考にするということだけで精一杯で、国際社会の中でその一員としての役割を主体的・積極的に推進するということまではいかなかった。いうまでもなく言語を絶するような弾圧体制の下で、それは不可能とでもいってよい状況に置かれていたからである。こういったところにも私たちは、当時の運動を推し進めていくことの厳しさを見て取ることが出来るのである。

7 「エドキンテルン」と教育労働者の国際連帯の研究

「戦後」教育労働者の「国際連帯」の重要性という角度から新興教育運動に注目したのは当事者としては前記の平野義太郎さんであるが、研究者として本格的に取り組んだ最初は五十嵐良雄さんであった。教育運動史研究会がまだ新教懇話会であった時期に既に「昭和初期の教育運動と国際連帯に関するノート——『教育新潮』中曾根論文を読んで——」をその機関誌『教育運動史研究』第6号（1962.9.1.）に発表している。そこには『教労』や『新教』の運動について「過去において、はっきりした目的意識をもってなされた唯一の教育的抵抗である」とした上で、その運動に「注目し、こだわり続けている」理由が次のよう述べられている。

今日の日本の教育・教員運動の当面している課題の殆ど総べてが、既に、昭和初期の教育運動の中に、原初的な形態で現れており、その解明なくしては、現在の停滞した運動状況を正しく突破できないように思えるということである。つまり、わたしの頭には、政治と教育との関係を中心とした、当時の教育的抵抗と挫折の実相を明らかにせずして、どうして、現在の教育・教育運動を前進せしめることが出来ようか、という考えが相当、根深く存在しているのである。

ここに示された事柄については、文章表現の点で多少違和感を持つことはあっても、その中身は当時の「懇話会」の人たちの思いと共通するものであったといっていよい。しかし五十嵐さんの研究課題、即ち新興教育運動を「国際連帯」という視点から解明するという課題に正面から取り組もうという意識は1960年代の懇話会の中ではまだほとんど育っていなかった。1969年9月になって五十嵐さんから出された「エドキンテルン機関誌総目録」（ドイツ語版からの翻訳）を教育運動史研究会になってからの機関誌『教育運動研究』第11号に載せた際、井野川さんが「編集後記」で「五十嵐さんの労に感謝」しながら「教育運動の国際連帯性が再認識されなければならない時代ですので、そうした面からの研究と発言が出てくることを期待するものです。」と記しているのは、このへんのことを物語っている。

この「総目録」の直後五十嵐さんは、初めての著書『国際教育論序説』を現代評論社から出している（1969年9月20日）。この書は「エドキンテルン」についてだけ述べたものではないが、その研究をしていく上で大切な問題が扱われており、そこに示されたことが総て正論で、異を差し挟むところがないというようなものとはいえないが、是非とも参考にしなければならないものであることは間違いない。そこでこの本の構成を記しておく、以下の通りである。本来ならその全体を示すとよいのだが、紙面の節約のため著者の問題意識・課題意識を記した第一部第一章と、本稿に直接関係する第二部第四章に限って節に当たる部分の題名まで記すことにする。

第一部 国際教育論への私の歩み

第一章 世界認識への私の原点

- 1 革新勢力の現実認識への問 2 アジア・アフリカの現実
- 3 反植民地主義の発想とは何か 4 アジア・アフリカの体験を総括して
- 5 ソヴィエトの現実 6 われわれにとって世界とは何か

第二章 国際教育に関する諸問題

第二部 教育における国際主義——その歴史と現実——

序章 国際教育に関する問題状況

第一章 ユネスコ——教育文化におけるコスモポリタニズム——

第二章 平和部隊——文化思想対策と新植民地主義——

第三章 エスペラント——インタナショナリズムと国際語——

第四章 教育労働者インタナショナル（エドキンテルン）——国境を越える教師の闘い——

- 1 戦後教育の先行者 2 国際教育問題の発生
- 3 エドキンテルンの歴史 4 ドキンテルンと第三インター

第五章 世界教員組合連盟（FISE）——戦後世界の国際教育労働運動——

なお、第三部資料編には「第三回世界教員会議の一般決議」や「教育労働者インタナショナルの規約綱領」（但し「エドキンテルン規約」全9章23条の内、前半の第四章まで）などの重要資料10点と、以下の年表類（単なる項目を並べたものでなく、「解説」ないし「コメント」風に記されている）が収録されている。

戦前の国際教育労働戦線略年表——教育労働者インタナショナルの活動を中心に——

世界エスペラント運動の歩み——国際的なエスペラント組織を中心に——

戦後国際教育労働運動史年表——世界教員組合連盟の活動を中心に——

この書を最初に読んだ時に印象深く思われたことの一つは、「植民地支配というものが、いかに過酷きわまるものであったか」ということと、「新植民地主義」というものが如何に巧妙な支配形態であるかということであった。

その前者に関わって五十嵐さんは、1963年初頭から初夏にかけてのインドを起点とした東南

アジア諸国の教育事情の調査、1965年春から初夏にかけての北アフリカとヨーロッパ諸国及びソヴィエトの歴訪、そしてその数ヵ月後インドをはじめとする東南アジア諸国への再度の訪問、こういった体験を下に、インドを例にしてその衝撃的な現実が投げかけている事態を次のように記している。イギリスの植民地支配は「あらゆる富をインドから収奪し、残したものはただ貧困そのものにすぎなかったのだ。独立後、既に一六年もたった今日、なおそれを克服しきれずにいる。それほど深く徹底的にインドの中に、植民地主義の傷が刻みこまれてしまった」（30 ページ）。そして後者の「帝国主義、とくに、アメリカ帝国主義の新しい形態」である「新植民地主義（通称ネオコロ）」がとっている「手段」については、「AA 連帯機構第四回大会理事会決議」の次の一文を紹介している。

進んで形式的な独立を与え、実質的な植民地支配を温存し、維持しようとしたり新しい独立国を共同体や連邦の中に組み込んでしめつけたり、また旧植民地の民族や部族を分断し、対立させて分割支配をもくろんだり、さらにまたさまざまな国際機関——国連、世界銀行、ヨーロッパ共同市場など——の経済、技術援助の形式で集团的に経済的支配と収奪をころみたりするなどがそれである。（39 ページ）

こういった世界の現実を示した上で五十嵐さんは、「現実をもっぱら二つに類別して認識していく」「革新勢力の二分法」⁽¹⁷⁾（8 ページ）を排し、「私たちの実感をこそ最も基本的な発想の根拠にする」ことによって「この世界を民族的な、または国家的な区分けによって眺めるということ克服」することを主張する。そしてそうすることが「根源的な人間主義の発想」であり、「真のインタナショナリズム＝国際主義の現実認識でもある」とするのである。勿論このような主張に異をさしはさむことは出来ないばかりでなくある種の「清新さ」さえ感じる。しかし、この書の全体を通して見てみると、そこにこれまでの民主主義や社会的改造・変革を求めて展開されてきたさまざまな努力が「総否定」されているような印象を感じざるを得ないのである。例えば先に記した「教労」・「新教」の運動を「過去において、はっきりした目的意識をもってなされた唯一の教育的抵抗である」として高く評価したことの意味が（多分その当時の思っていたこととは異なって）この書の段階では「エドキンテルン」という国際組織に加盟して活動を行ったこと、即ち「国境を越える教師の闘い」に参加したことのみにあるかのように読めるということである。いうまでもなくその運動が「教育労働者」との意識をものにし、国際的な運動に変わったのは他の教育運動には見られない大きな特長であるのは事実だが、「教育運動史研究」の観点からいえばそうだからといって他の教育運動を軽く見るわけにはいかない。そんな点も含めて、教育運動史研究会としてはこの書を正面から検討の対象とすべきであったのだと残念に思わずにはいられない。

1970年代に入って教育運動史研究会の機関誌などの中に「エドキンテルン」を対象にした研究が登場するようになった（後掲の「資料」参照）。その代表的な一つが花井 信「日本教員運動史におけるエドキンテルン紹介・加盟の意義」（『教育運動史研究』第17号、1975年9月）であり、もう一つが増井三夫「国際教育運動の成立史 教育労働者インターナショナルの研究ノート」

(上) および (中) (『季刊 教育運動研究』第2号, 1976年10月, 第4号, 1977年4月) である。両論文とも「実証」性に富んだ好論文だといってよい。ただ残念なことは、前者では注記の(19)で「エドキンテルンの教育観をより具体的にみていくことが残された課題である。機関誌の分析をすすめたい」とあるのだけれど、その課題が果たされていないということである。また、後者では(中)に続く(下)の執筆が待ち望まれたのであるが、目にすることが出来ないでいる(もしかしたらこれの掲載誌とは別のところで発表されたのかもしれないが、そうだとしたら両氏にその非礼をお詫びしなければならない。) こういった70年代の後半の「エドキンテルン」研究も参考にして、1980年の古沢常雄論文が生れる。それがこの「新興教育基本文献集成」の最終巻(『資本主義下の小学校』, 1980年9月, の中に掲載されている「『新興教育学』解説」である。

その「基本文献集成」の解説は、収録された全5冊の内の4冊について柿沼が、そしてあとの『新興教育学』について古沢さんが担当したのであるが、それについて当時「研究会」事務局長であった森谷 清さんは次のように書いている(「文献紹介 新興教育復刻版刊行委員会編『新興教育基本文献集成』(全五巻)」, 『季刊教育運動研究』No. 14, 一光社, 1981年3月.)。

最終巻には、一四三ページにおよぶ解説(柿沼肇, 古沢常雄)があり、この運動と諸文献の理解を深めるうえで大変役立つ。この解説は、独立して単行本になるほどの重厚で力が入ったもので、国際的な広がりや歴史的な深まりのなかで一つ一つの文献にふれることができるのは両氏の研究蓄積が結実しているからであるといえる。

この評価は私(柿沼)に関しては過分に過ぎるけれど、古沢さんの論文については適切⁽¹⁸⁾である。表題は「『新興教育学』解説」となっているが、次の論文構成を見れば分かるようにそこにとどまらないで「エドキンテルン」についての総括的な研究だといってよい。

一 「新興教育学」の本のこと

二 「エドキンテルン」とは何か

三 エドキンテルンの歴史

- | | |
|----------------|------------------|
| 1 エドキンテルンの創設 | 2 第二回大会より第四階大会まで |
| 3 第五回大会・国際教育デー | 4 第六回～第七回大会 |
| 5 その後のエドキンテルン | |

四 ラテン・アメリカの諸国との連帯

五 エドキンテルンと日本の教育運動

この「解説」は、これまで「研究会」のなかで取り組まれた成果は勿論のこと欧文の文献なども活用してよくまとめられている。もし「エドキンテルン」の研究をしようと思う人がいたらここから出発したらよいと思われるのである。残念ながら教育運動史研究会の中ではそれに続く研究が出ていない。この小論で五十嵐さんの『国際教育論序説』についての論評をはじめ「エドキンテルン」の問題に少しばかり多くのスペースを割いたのは、そんな思いがあつてのことである。

〔この項了、以下次号に続く〕

〔追記〕

本稿は「はじめに」で記したように「新興教育運動」に関する研究成果について全体的に述べるつもりであったが、各項がかなり長めになったこと、加えて最後の「エドキンテルン」についての部分を取り入れたことによって、指定の枚数をはるかに超える長文になってしまった。「新興教育」に限っても未だいくつか書かなければならないこともあるので、今回は思い切ってここまでで打ち切ることにし、次号でこの続きを記すことにしたい。何か中途半端な気がしないでもないが、お許し願いたいと思う。

(2015年11月16日)

〔補註〕

- (1) 新樹出版からは「新樹叢書」の他に岡本洋三『教育労働運動史論』（1973年2月）と浦辺 史『日本の児童問題』（1976年5月）の二冊が「新樹選書」という形で出されている。いずれも「教育運動史の研究」として非常に重要な意味（意義）を持つ著作である。その他「研究会」が直接企画編集したものではないが、「戦後」初期の教員組合運動の中で中心的役割を果たした岩間正男さんの第三歌集『炎群』（1974年2月）も「研究会」の協力で出版されている。
- (2) この時のことを向山さんは「われながら意外に思われるほど『研究会』の諸先輩や研究者のかたたちに喜ばれた」「はからずも提供できたことは、私としても大きな喜びであった」と記している。「私の教育運動史研究」、『季刊 教育運動』No.9, 1978年12月。
- (3) 長野の「2・4事件」（「長野県教員赤化事件」）に関してはこれも「運動史研」の協力で『抵抗の歴史 戦時下長野県における教育労働者の闘い』（二・四事件記録刊行委員会編、労働旬報社、1969年10月）という分厚な書籍が出されている。大変重要な文献であるが、その時は未だこれらの資料は発掘されていなかった。
- (4) そのせいかどうか定かでないが、No.3には1および2にあった「刊行のことば」が付されていない。
- (5) 無産者託児所の「保母」であった高山智恵子さんはじめ関係者の「談話」などが活用されている。
- (6) 山下さんが「戦前」出したものの中でこの書以外に『明日の学校』（厚生閣、1939年9月）が明治図書「世界教育学選書」の中の一冊として刊行されている。奥付などどこにも発行年月日が記されていないのでその点は不明である。なおこの書には海老原治義さんの「山下徳治とその教育学」と題する「解説」と、子息森 礼治さんと柿沼の共作である「論文目録」がつけられていて、「山下」を研究する際には役立つものがあると思われる。
- (7) 本庄さんについての研究書としては布野栄一『本庄陸男の研究』という大著が出ている。桜楓社、1972年4月。但し、「教育運動」については触れられていない。収録されている山田昭夫編の「年譜」と「研究文献目録」は参考になる。また1968年に2月に出された創作集『橋梁』の中の「解説」は本戸若雄さんが書いたもので、そこでは本庄さんの教育運動時代にも触れられていて研究上参考になることが少なくない。
- (8) その後の本庄さんの「転向」などについては(7)の『本庄陸男の研究』が参考になる。
- (9) 『プロレタリア教育に諸問題』の「序」に「私も直接には、『教育の利潤』を論評することによって、嘗て自分の勤めてゐた学園を去らしめられることになったのだった。」という記述がある。
- (10) 初版本と改訂版を照らし合わせてみると、削除部分は第二部の「三 ××青年同盟の任務（レーニン）」のところにかなり集中している。ここでの「××」は「共産」のこと。
- (11) 発行元の日本教育学会というのはいわゆる「学会」ではなくて出版社の名称である。「社長の佐藤武が、学年別教育技術指導雑誌の発行で、予想以上に儲かったので、青年教師めあての教育評論誌を発行して、上田唯郎、上田庄三郎に、その編集をまかせたのであった」（『教育新潮』こぼれ話、『新興教育』複製版月報改題『教育運動史研究』第7号、1966年9月）。「昭和二年四月創刊、初めは自由主義的傾向の教育評論を主として掲載したが、昭和三年一月号を転換点として、はっきり

『新しい時代の教育運動の口火』をきろうという狙いを持った雑誌に転換していった（三橋悌子『『新教』・『教労』の教育運動の源流——大正の新教育の変質と、『教育新潮』の側面的意義——』、同前誌掲載）。編集者の二人は、3年後の新興教育研究所の創立に際してその「創立委員」となっている。

- (12) 1924年8月ブラッセル大会で制定された「教育労働者インタナショナル規約」は、その後二度、部分的な改正が為された。改正後の「規約」は『国際文化』誌1929年3月号に伊藤三郎訳で載っている。その末尾に訳者の「注意」書きがあり、改正年次と改正条項が記されている。また浅野研真訳編の『マルクス主義と教育問題』（自由社、1930年12月）にも収録されているが、そこでは「一九二四年ブラッセル大会にて採用 一九二六年ウィーン大会にて修正」とある。なお山村沢のものは上田庄三郎『教育戦線』（自由社、1930年7月）所収の論稿「教員組合論」でも「参考」文献の一つとして掲載されている。
- (13) この記事は私も読んだことがあるが、今その掲載誌が手近かなところがないので花井 信「日本教員運動史におけるエドキンテルン紹介・加盟の意義」（『教育運動史研究』第17号、1975年9月）から再引用させてもらった。
- (14) この「ニュース」は、『新興教育』復刻版第七巻に複製・収録されている。
- (15) 岡本洋三「戦前教育運動史研究の問題点」（『労働運動史研究』第52号）中のIVの（2）にある（注4）から引用。
- (16) 増淵さんも「教育労働運動小史2」（『明るい学校』第4号、1947年9月）中の『『エドキンテルン』への加盟』の項で次のように書いている。「この『教文協会』→『小教連』のエドキンテルンへの加盟は、これ以後の、わが国の教育労働運動に対し基本的な方向を示したものとして、最も重要な意義をもっている（後略）」
- (17) 五十嵐さんによれば、この「二分法」というのは「この現実の動向をすべて、プラグマチックに上（権力）と下（民衆）との闘い、あるいは左（進歩勢力）と右（反動勢力）との闘いというように常に問題を二つに類別して認識していく」（9ページ）発想や思考方法のこと。これを含めた五十嵐さんの主張についての私（柿沼）の感想等は本文に記した通りである
- (18) 但し、「修正後の規約は『新興教育基本文献集成』の第三巻、浅野研真『プロレタリア教育の諸問題』所収の「エドキンテルンの活動」の項に収められている」（117ページ）というのは誤り。元々はこの論稿中に記載されていたが『諸問題』に再録の折に浅野研真編『マルクス主義と教育問題』の方へ移されている。

[資料]

「エドキンテルン」関係文献等一覧

(2015 年 11 月 16 日作成)

I 平野義太郎 著作

- ① 「エドキンテルン・ライブチッヒ会議に参加して」
黒滝チカラ・伊藤忠彦編『日本教育運動史 2 昭和初期の教育運動』所収、
三一書房、1960.11.10.
- ② 「(同上)」
井野川・森谷・柿沼編『嵐の中の教育 1930 年代の教育運動』に再録、新
日本出版社、1971.12.20.
- ③ 「教育労働者組織の国際的団結と連帯——エドキンテルンの活動の歴史（一九
一九年創建から一九三〇年まで）——」
『教育運動史研究資料』No.3 教育運動史研究会、1972.8.24.
- ④ 「教育運動における国際連帯——エドキンテルン大会に出席したころ」
教育運動史研究会編集・発行『教育運動史研究』第 15 号、1973.9.1
- ⑤ 「新興教育運動の基本路線」
教育運動史研究会編集『季刊 教育運動研究』創刊号、あゆみ出版、
1976.7.31.
* 「『新興教育』複製版刊行の意義」について述べたものの一つ。『新興
教育』1933 年 6 月号の近江信吾「エドキンテルン第七回大会につい
て」に触れている。
- ⑥ 〈巻頭〉「エドキンテルンの活動から学ぶ」
教育運動史研究会編集『季刊 教育運動研究』No.4、あゆみ出版、1977.4.30.

II 五十嵐良雄 著作

- ① 「昭和初期の教育運動と国際連帯に関するノート——『教育新潮』中曽根論文
を読んで——」
『教育運動史研究』（『新教の友』改題）第 6 号、新教懇話会、1962.9.1.
- ② 「国際教育労働運動のあゆみ」
『教育評論』1967 年 6 ～ 7 月号
* 出所『民間教育史研究事典』（民間教育史料研究会 大田 堯・中内敏
夫編、評論社、1975.8.5.）「エドキンテルン」の項（執筆 土屋基規）
- ③ 「エドキンテルン機関誌総目録 1926 年 11 月号～ 1930 年 7 月号（ドイツ語版）」
『教育運動史研究』第 11 号、1969.9.1.
- ④ 『国際教育論序説』現代評論社、1969.9.20.

第二部 第四章

「教育労働者インタナショナル（エドキンテルン）——国境を超える教師の闘い——」

第三部 資料編

「資料編の解説にかえて」 * 竹内良知『教育実践と基本理論——国際民主教育論集』（青木書店，1959.7.15.）からの引用あり

「教育労働者インタナショナルの規約綱領——La Internacio de Eduklaboristoj——」 * 第一章から第四章まで

「戦前の国際教育労働戦線略年表——教育労働者インタナショナルの活動を中心に——」

Ⅲ 「戦後」の研究文献等（Ⅰ，Ⅱ以外，1980年代までに発表されたもの）

花井 信・林 量俣・増井三夫訳（英文から）「資料・エドキンテルン編 教育労働者
1929年10・11・12月合併号（新版第3号）」（英語版）

『教育運動史研究』第13号，1971.10.1.

花井 信「資料 エドキンテルン機関誌に紹介された日本の教育運動」

『教育運動史研究資料』No. 3，1972.8.24

土屋基規「資料 エドキンテルンと日本の教育労働運動についての略年表」

『(同前)』

花井 信「日本教員運動史におけるエドキンテルン紹介・加盟の意義」

『教育運動史研究』第17号，1975.9.1.

花井 信「文献解説⑥『国際文化』・『プロレタリア科学』——特にエドキンテルンについて——」

『新興教育復刻版全七巻月報』No. 6，編集 新興教育復刻版刊行委員会，
発行 白石書店，1975.9.30.（誌面に記載なし，復刻版第六巻発行日）

* 復刻版はその後「別巻」が追加された。したがって『月報』はNo. 8まで発行。

増井三夫「国際教育運動の成立史（上）教育労働者インターナショナルの研究ノート
（一）」

『季刊 教育運動研究』第2号，あゆみ出版，1976.10.30.

増井三夫「国際教育運動の成立史（中） 同上（一）」

『(同前)』第4号，1977.4.30.

古沢常雄「『新興教育学』解説」

新興教育復刻版刊行委員会編『新興教育基本文献集成5』（本庄陸夫『資本主義下の小学校』）所収，白石書店，1980.9.30.

IV 触れた箇所のある文献（1980年代まで）

森谷 清「エドキンテルンへの加盟」

黒滝チカラ・伊藤忠彦編『日本教育運動史 2 昭和初期の教育運動』（三一書房，1960.11.10.）所収の森谷論文「第二章『日本教育労働者組合』の結成と『新興教育研究所』の発足」の3の第3項

木戸若雄「プロレタリア教育書誌（二）——『新興教育』の外堀的図書——」

五 エドキンテルン関係

『「新興教育」複製版月報』第5号，『新興教育』複製版刊行委員会
1966.2.25.

三橋悌子『「新教」・「教労」の教育運動の源流——大正の新教育の変質と、『教育新潮』の側面的意義——』の「九，教員組合運動の意識の流れ」の江頭順二（本庄陸男）からの引用（江頭「昭和三年度教育労働運動」，『教育持論』昭和三年，一二，二五号，開発社）。

『新興教育』複製版月報改題 『教育運動史研究』第7号，1966.9.1.

岡野 正「エドキンテルン加盟の歴史的意義」

岡野「日本教育運動史研究（1）——1920年代の動向——」第二章（4）中の一項目

『北海道大学教育学部紀要』第18号別刷，1971.3.）

森 透「（エドキンテルンへの加盟問題）」

「〈入門講座〉運動史解説『新教』『教労』の運動（1）」中の一文（10ページ）

『新興教育復刻版全七巻月報』No. 1，1975.4.30.

岡本洋三「戦前教育労働運動史研究の問題点——教育労働運動史研究の課題」のIV（2）

「教育労働者意識の明確化と国際的運動とのかかわり」

『（労働運動史研究 52号）教育労働運動の歴史』，編集 労働運動史研究会，発行所 労働旬報社，1980.7.10.

* この号の実質的編集人は井野川潔

* この論文は，岡本著『教育労働運動史論』（あゆみ出版，1983.2.15.）に収録

V 当事者の記録（「戦後」）

増淵 穰「エドキンテルンえの 盟」（加盟の加が印字されていない——柿沼）

「教育労働運動小史 2」第二章中の一項目.

『明かるい学校』第4号，明かるい学校社，1947.9.1.

* 〈教育労働インターナショナル規約〉「第一章緒論」の引用記載あり，

下記著書の32ページ.

* この論稿は増淵著『日本教育労働運動小史』(あゆみ出版, 1972.7.20.)にごく一部分加筆・修正して再録.

池田種生「『新興教育学』の功績」

「故・浅野研真君を語る——思い出すまま(4)——」中の一項目

『「新興教育」複製版月報』第6号,『新興教育』複製版刊行委員会事務局, 1965.12.25.

* この論稿は池田著『プロレタリア教育の足跡』(あゆみ出版, 1971.8.10.)に再録.

伊藤信雄「もの忘れと松永君のこと」

「シンポジウムから帰って——小笠原幸次郎のことなど——」中の一項目

『教育運動史研究』(『「新興教育」複製版月報改題』)第8号,『新興教育』複製版刊行委 兼 新教懇話会事務局, 1966.11.1.

山口近治「発言」(教育運動史研究会 1969 年夏季研究集会における)

前記岡本論文中のIVに2の(注4). * この論文での「注」は, 断り書きが無いけれど, 井野川さんの執筆.

山口近治「(「教労版」ニュースでは)」

「非法教員組合運動の追憶」中の一文(129ページ)

『教育運動史研究』第12号 教育運動史研究会, 1970.5.16.

* この論稿は加筆の上山口著『治安維持法下の教育労働運動』(あゆみ出版, 1977.12.1.)に収録.

VI 「戦前」の文献

中曽根源和「教育労働者国際同盟＝無産階級の国際的教育戦線の紹介と所感＝」

『教育新潮』1928(昭和3)年6月号, 編集兼発行人 佐藤 武, 発行所 日本教育学会

* 『「新興教育」複製版』第7巻に複製して収録

山村桃代 訳編「ライプチヒに於けるエドキンテルン大会概要(一)——日本教育者連盟におくる——」

(『同上』)

「教育労働者インターナショナル規約 一九二四年ブリュッセル大会制定」という記載あり

* この文献の末尾に(続く)とあるが,『教育新潮』7月号は未発掘のため内容不明

南 哲二 訳「教育労働者インターナショナル第五回大会後総書記から万国教育労働者に

対して送るアピール」

『国際文化』第二年第一号，発行兼編集所 国際文化研究所，発行編集兼印刷人 大河内信威，発売所 白揚社，1929.1.1.

* 復刻版『国際文化』第一巻，編者 国際文化復刻刊行会，発行所 白石書店，1974.3.30.

教育労働者インターナショナル

（『同前』）第二年第三号，1929.4.1.

* 復刻版『国際文化』第二巻，1974.5.125,

「一 ブルジョアジーとプロレタリアの教育」 マルセル・ブーブー

「二 教育労働者インターナショナルの九年間——ボルドー大会よりライプチヒ大会まで——」 伊藤三郎

「三 教育労働者インターナショナル規約——（一九二四年ブラッセル大会にて決定）——」 * 全9章23条

* 末尾に「注意」書きあり，改正年次と改正条項. 「一九二六年より有効」

「四 英国教員労働同盟——教育インテルンの有力支部——」 伊藤三郎

エドキンテルンの活動（山口顕次訳）

『国際文化』第二^(ママ)巻第九号，（1929年）9月号 1929.9.1,

* 復刻版第四巻，1974.7.15.

「ソウエート連邦教員労働組合第七回大会後報」 エル・メコノチナ

「アメリカ教育情況の側面」 （無署名）

「イギリスに於ける教育の合理化」 （無署名）

「フランス師範学生のエドキンテルン加入」 （無署名）

「エドキンテルン執行委員会とベルギー大会」 中央書記局

「エドキンテルンとベルリン反ファシスト大会」 ゲー・コニヨー

エドキンテルン中央書記局（山口顕次訳）「新帝国主義戦争と教員」

『国際文化』第2年第10号，1929.10.1.

* 復刻版第四巻，1974.7.15.

江頭順二（本庄陸男）「昭和三年度教育労働運動」（『教育持論』昭和三，一二，二五号，開発社）からの引用

* 花井 信「日本教員運動史におけるエドキンテルン紹介・加盟の意義」（『教育運動史研究』第17号，1975年9月）に引用あり.

* 三橋梯子「『新教』・『教労』の教育運動の源流——大正の新教育の変質と，『教育新潮』の側面的意義——」の「九，教員組合運動の意識の流れ」中で触れている.

『新興教育』複製版月報改題 『教育運動史研究』第7号, 1966.9.1.

(無署名)「国際的進出の第一歩は 歩みだされた」

『教文協会ニュース』

* 号数, 発行日の記載がないのでこの点は不明. 紙面全体から1929年10月は初旬の発行と推定.

* 複製版第8巻, 1966.11.1.

山口顕次「最近帝国主義の教育政策とエドキンテルンの活動」

『プロレタリア科学』(1930年)1月号, 1930.1.1. 発行兼編集所 プロレタリア科学研究所, 発行編集兼印刷人 大河内信威, 発売所 白揚社,

* 同号に山口「プロレタリア教育当面の諸問題」掲載

* 『プロレタリア科学』復刻版は全21巻, 編者 法政大学大原社会問題研究所, 発行所 法政大学出版局, 1979.11.5. ~ 1980.10.8.

(「プロレタリアニュース欄」)「エドキンテルン執行委員会の八月会議」

『プロレタリア科学』(1930年)2月号, 1930.2.1.

(教育労働者インタナショナル(巴里))「日本の教育労働者諸君に与ふ!」

『プロレタリア科学』(1930年)5月号, 1930.5.3. 発行兼印刷所 プロレタリア科学研究所, 発行編集兼印刷人 本郷 孝, 大売捌所 東京堂 東海堂 北隆館 大東館

上田庄三郎「教員組合論」の「四, 附」

『教育戦線』, 自由社, 1930.7.5. (* 自由社最初の出版書)

* 山村桃代訳教育労働者インターナショナル規約を掲載

* 上田庄三郎著作集2『教育のための戦い』所収, 国土社, 1977.2.25.

浅野研真『マルクス主義と教育問題』「第五部 第教育労働者運動」所収

発行所 自由社, 初版発行 1930.12.16. 改訂版発行 1931.3.25.

「一, 教育労働者インタナショナル規約 一九二四年ブルッセル大会にて採用 一九二六年ウィーン大会にて修正」 * 全文9章23条

「二, 全露教育労働者連盟規約 一九二五年二月二十日―二十五日の連盟第五回大会にて決定」 * 全文5章48条

『プロレタリア科学 資料月報』(「国際定期刊行物内容紹介」欄「教育インタナショナル(フランス版)(一九三〇年十月・十二月号)」

『プロレタリア科学 資料月報』1931年4月号, 1931.4.1. 発行兼印刷所 プロレタリア科学研究所資料部, 発行編集兼印刷人 林田茂雄, 発売所 共生閣

* 『資料月報』(全)復刻版は, 編者 法政大学大原社会問題研究所, 発行所 法政大学出版会, 1980.12.10

浅野研真「教育問題に関する若干文献」プロレタリア科学研究所資料部編集『プロレタリア科学 資料月報』（1931年）六、七月号、1931.7.15. 大売捌所 東京堂 東海堂 北隆館 大東館

六、七月号（1931.7.15.）「はしがき（一）エドキンテルンの機関雑誌及びその諸刊行物」

八、九月号（1931.9.1.）「（二）エドキンテルン加盟各国支部の機関紙類『プロレタリア科学 資料月報』」

六、七月号「新刊批評」欄「エドキンテルン編 新興教育学」

八、九月号「我等の雑誌」欄「新興教育（八月号）」

浅野研真『プロレタリア教育の諸問題』所収文献、原本は、発売 厚生閣書店、1931.9.31.

*「新興教育基本文献4」として復刻、編者 新興教育復刻版刊行委員会、発行所 白石書店、1980.7.10.

「教員組合の結成へ」（1930.8.14.）

「エドキンテルンの活動——国際教育労働者運動小史——」（*日付 記載なし）

「エドキンテルンと反戦闘争」（1931.7.12.）

VII 『新興教育』誌掲載の文献等

浅野研真「エドキンテルンの活動——教育労働者の国際運動——」, 1930年九月創刊号

*『プロレタリア教育の諸問題』に再録、但しこの論稿に記載してあった「教育労働者インタナショナル規約」は「諸問題」に再録の折に『マルクス主義と教育問題』の方へ移行.

エドキンテルン欄（浅野研真訳） 1930年十月号

「ソヴェート同盟干涉××××！ 万国の教育労働者へのアピール」（総務書記局）

「メキシコの教員連盟 エドキンテルンに加入す」

ニュース 国際・日本 十一月号

ニュース 日本 国際 十二月号

国際国内ニュース 1931年一月号

ニュース 国際 日本 二月号

国際ニュース 三月号

「全世界に吹きすさぶ教員減俸減首の嵐（日本に於ける減俸 他）」

「世界的に醒めつつある女教員」（浅野研真）*『諸問題』に再録

国際ニュース 四・五合併号

「階級闘争と教育労働者」

国際ニュース 七月号 *六月号にはニュース欄なし
浅野研真「エドキンテルンと反戦闘争」 八月号 *『諸問題』に再録
ソヴェート教育特集 十一月号

*九・十合併号には「ニュース」欄はない

*十二月号および1932年一・二月合併号, 三月号, 四月号(プリント
版最終号)にはニュース欄なし

新興教育同盟準備会機関誌『新興教育』掲載 (いわゆるプリント版)

国際国内教育ニュース 1932年9・10月号

「エドキンテルンの大会はハンブルグで開催」他

国際ニュース 11, 12月号

近江信吾「エドキンテルン第七回大会について」, 「書記局の意見」, 1933
年6月号

「資料 エドキンルン第七回の概 全教育団体・万国の教育労働者に告ぐ!」
(同前)

*『新興教育』複製版(活字版, プリント版)は『新興教育』複製版刊
行委員会編集・発行, 1965.10.15. ~ 1968.11.1.